

医学部ウォーカー

1面：医学研究科長・医学部長寄稿/就任のご挨拶
2面：就任のご挨拶/1面「子ども医療支援センター」を開設して「研究発表賞」を受賞して
3面：「ポスター発表部門」優秀賞を受賞して/第39回日本糖尿病学会「肥満動物学会」を主催して/学生優秀賞を受賞して
4面：日本糖尿病学会トランプ賞を受賞して/第153回日本放射線医学会北日本地方会「優秀演題賞」を受賞して/ESSKA Basic Scientist Abstract Awardを受賞して
5面：第103回日本病理学会東北支部学術集会「若手最優秀演題賞」を受賞して/日本製薬学会「27th World meeting on sexual medicine」を主催して/最終講義
6面：医学科学学位記伝達式/臨床実習生（医学）認定証授与式
7面：第120回医師国家試験結果ならびに令和7年度卒業生の進路状況
8面：入学試験報告
9面：青森県知事と前入生との懇談会/研究奨励修めおよび優秀発表賞について
10面：研究奨励修め優秀発表賞を受賞して/弘前大学学生表彰
第14回世界自閉症啓発祭「特別講演会in弘前」
11面：学生日より一年間を振り返って/OB・OG書籍出版の紹介
12面：関連病院勤務報告/留学だより
13面：若手教員・医師だより/研究室紹介/看護工学講座
14面：耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座/部活動紹介/水泳部
15面：山岳部/漢方医学研究会/入學奨励

題字 元弘前大学長 遠藤正彦氏筆

医学研究科長 寄稿
医学部 石橋 恭之

サッカー日本代表に学ぶ、

弘前大学医学部の成長戦略

医学研究科長 石橋 恭之



とで、世界基準の業績が増えていくと思います。第二の「地域密着」は、弘前大学のモットーです。Jリーグが地域に根ざしたチーム作りで日本サッカーの底上げをしたように、我々も「地域から信頼され、必要とされる医学部」を追求しています。特に「若木健康増進プロジェクト」における超多項目健康ビッグ

データは、弘前から世界へ発信できる唯一無二の武器です。JFAの「グラスルーツ（草の根）」なくして代表の強化なし」というスローガン同様、地域を大切にすることが、結果として世界をリードする研究へと繋がると確信しています。そして第三の「ジュニア世代の育成」は、医学部・大学院における教育そのもの



附属病院長就任のご挨拶

産科婦人科学講座 教授 横山 良仁



このたび弘前大学医学部附属病院長を拝命いたしました。長い歴史を有し、地域医療を支えてきた附属病院の運営を担うこととなり、その責任の重さを日々感じております。

私はこれまで、産科婦人科診療科長、周産母子センター長、手術部長、病院長補佐、副病院長として、診療現場、手術部門、地域医療連携、働き方改革、医療

安全などに携わってまいりました。令和六年からは医療安全管理責任者として、患者安全を病院運営の中心に据える取り組みにも関わってきました。これらの経験を通じて強く感じているのは、病院は一部の部署や職種だけで成り立つものではなく、多くの職員の努力と連携によって支えられているということなのです。附属病院は、青森県唯一の特定機能病院として、高度医療、救急・災害医療、周産期・小児医療、がん診療、教育、研究を担う重要な存在です。一方で、人口減少、少子高齢化、医療人材不足、物価や人件費の上昇など、大学病院を取り巻く

環境は厳しさを増しています。だからこそ、理念だけを掲げるのではなく、現場に根ざした改善を一つずつ積み重ねていくことが大切だと考えています。私が特に重視したいのは、風通しのよい、働きやすい病院づくりです。医療安全も、診療の質も、患者サービスも、教育・研究も、現場で働く職員の声を抜きにしては成り立ちません。職種や立場を越えて意見を交わし、課題を共有し、できることから改善につなげる。その積み重ねが、職員の安心感となり、患者さんやご家族の安心にもつながるものだと思います。そのためには、業務改善、

タスクシフト、DXの推進、人材確保、休暇を取りやすい環境づくりなど、具体的な取り組みを着実に進める必要があります。診療を支える人が疲弊しないこと、若い医療人が学び続けたいと思えること、研究に向かう意欲が日常の中で支えられることは、大学病院の将来にとって欠かせません。「和顔愛語」という言葉があります。袴田前病院長も用いていましたが、和やかな表情と温かい言葉を

もって人に接するという意味です。これは附属病院がこれからの受け継ぐべき姿勢だとも思います。患者さんに対しても、共に働く仲間に対しても、互いを尊重し、声をかけ合い、支え合う空気を大切にしたいと考えています。大きな約束を掲げるよりも、日々の診療と運営の中で、誠実に課題に向き合うことを第一にしたいと思います。

ます。患者さんに「ここで診てもらってよかった」、職員に「ここで働いてよかった」と感じてもらえる病院を目指してまいります。大学本部、医学研究科、保健学研究科、地域の医療機関、行政の皆さまとも連携しながら、附属病院の役割をしっかりと果たしていきたいと思っております。今後ともご指導とご協力をよろしく申し上げます。

結城 敏志

教授就任にあたってのご挨拶

がんゲノム医療学講座 教授 結城 敏志



先生方と再び同じ場で働くことに、深いご縁を感じております。卒業後は北海道大学医学部附属病院で研修を開始し、当初は消化器内視鏡医を志しましたが、脳梗塞の罹患を契機に進路を見直し、当院に在籍することになりました。その後、化学療法により患者さんが回復される姿に触れ、消化器腫瘍内科医の道を志しました。大学院では消化器がんに対する新規薬物療法の開発に取り組む、多施設共同臨床試験の立案・運営に従事してまいりました。これまでに関わった治療法の一部は胃がん・大腸がんの診療ガイドラインに収載され、日常診療に活かされております。現在も新たな標準治療の確立を目指し、臨床研究を継続しております。

また、がんゲノム医療の分野では、SCRNA-seqプロジェクトに立ち上げから参画し、がんゲノムプロファイル

このたび、二〇二六年五月一日付で弘前大学大学院医学研究科がんゲノム医療学講座の教授を拝命いたしました。結城敏志と申します。伝統ある本学にて講座を担うこととなり、身の引き締まる思いです。私は北海道の東に位置する中標津町に生まれ、釧路湖陵高等学校を経て一九九三年に弘前大学医学部医学科へ進学いたしました。学生時代は北鷹寮での生活を含め、多くの仲間と恵まれたかけがえのない時間を過ごしました。同期である消化器血液免疫内科学講座の櫻庭裕文教授をはじめ、当時親しくさせていただいた

伊リング検査の臨床実装、大腸がんにおけるバイオマーカー探索に関わってまいりました。これらの経験を通じ、個別化医療の重要性を強く実感しております。教育面では、これまでに多くのがん薬物療法専門医・指導医の育成に携わってまいりました。今後は青森県においても人材育成を重要な使命と位置づけ、若手医師が腫瘍内科を志し、地域で活躍できる体制づくりに努めてまいります。今回の着任は、本学で学んだ者としての恩返しの一環と捉えております。これまでの経験を活かし、診療・教育・研究のさらなる充実を図るとともに、青森県ひいては本邦におけるがん医療の発展に貢献してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

教授就任にあたってのご挨拶

消化器外科学講座 教授 石戸 圭之輔



この度、令和八年五月一日付で弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座の教授を拝命いたしました。伝統ある本講座の第七代教授としての重責を痛感し、身の引き締まる思いです。弘前大学の発展、および青森県地域医療の充実に少しでも貢献できますよう、努力してまいります。

私は青森県青森市出身で、県立青森高校を卒業後、一九九二年に弘前大学医学部に入学いたしました。そして一九九八年に医学部を卒業後、弘前大学医学部第二外科講座に入局いたしました。当時の第二外科は生体肝移植術と直腸癌に対する肛門温存手術の二つの柱を持つ、全国の外科をリードする講座でした。私は第二外科の先生方の新たな手術へ挑戦する高い意識に、大変興味を持っておりました。そして入局のきっかけとなったのは、当時の佐々木睦男教授の存在でした。佐々木先生は、人に優しく、患者さんに優しく、そして外科学には厳しくといった方で、当時医学部生の私にとっては憧れの存在でした。そのような中、私が医学部

臨床実習生の時、佐々木先生がタクシーの窓から体を乗り出すようにして、「石戸君！何やってんの、早く入局しなさい！」と私にお声がけいただいたことが大きなきっかけとなり、迷うことなく入局したことを今でも鮮明に記憶しています。入局後は、第二外科の先生方の温かなご指導をいただきながら修練を積み、二〇〇八年に袴田健一先生が教授に就任された時から、袴田先生のご指導のもと肝胆膵外科を担当してまいりました。肝胆膵領域の疾患は、膵臓癌や胆管癌などに代表される難治性悪性疾患が多いことが特徴です。大きな手術を乗り越え、決して楽ではない術後治療を受けても、再発や転移などにより満足できる生存期間が得られない患者様も少なくありません。現在多くの新たな治療法や薬剤が日進月歩で開発されていますので、これらの治療技術と手術技術を融合し、肝胆膵領域の疾患で悩まれる患者様に希望をお届けできるよう、全力を尽くして取り組んでまいります。

さて、消化器外科学講座は、一九四九年九月に横哲夫先生が弘前大学医学部第二外科講座の初代教授として開講され、その歴史は始まりました。これまで約七十五年にわたり、消化器外科学講座は横先生を含めた六人の教授により発展してきたという長い歴史があります。この歴史の中で、それぞれの時代に世界最先端の外科技術と研究成果が積み重ねられてきました。詳細をご紹介しますと、初代教授横哲夫先生による胆嚢結石症の発生メカニズムの解明、二代教授大内清太先生による胃全摘術の確立、三代教授小野慶一先生による十二指腸乳頭部（膵）の機能解明、四代教授今充先生による直腸癌に対する肛門温存手術法の確立、五代教授佐々木睦男先生による生体肝移植術の確立、そして第六代教授袴田健一先生による日本で初となるロボット膵手術の実施や遠隔ロボット手術に向けた実践的研究など、それぞれの時代の教授が国際的にも意義の高い成果を残されてきました。このような講座の歴史に心から敬意を持ち、さらに発展させていきたいと思います。五月一日に福田眞作学長より消化器外科学講座教授の辞令を受け、自分に与えられた責任の重さを実感するとともに、その使命を担えることへの喜びも感じています。消化器外科学講座の医師達とともに弘前大学と青森県の未来に少しでも貢献できますよう努力いたしますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

令和7年度 リサーチドクター養成キャンプを開催して

参加報告 医学教育学講座 准教授 花田 賢二

弘前大学は、令和六年度文部科学省「高度医療人材養成拠点形成事業（高度な臨床・研究能力を有する医師養成促進支援）」において、秋田大学の連携校として採択されました。本事業

の一環として、医学科学生をStudent Assistant (SA) (本学ではMedical Student Assistant: MSA)として雇用し、希望に応じて学内各講座へ配属しています。学生が主体的に研究に取り組

み、成果を学会発表や論文として発信することで、リサーチマインドを有する臨床医・研究医を育成することを目的としています。今年度は、各講座の多大なご協力のもと、医学科学生三十六名を令和七年七月よりMSAとして雇用し、十六講座（基礎系八講座、臨床系八講座）に配属することができました。MSAは授業の合間や終了後の時間を活用し、研究活動に取り組んでいます。

この度、文部科学省高度医療人材養成拠点事業として引き続き秋田大学と合同によるリサーチドクター養成キャンプを秋田県大潟村にて開催しました。今年度は参加者が大幅に増加し、学生は秋田大学から三十二名、弘前大学から二十九名、教員は秋田大学から二十七名、弘前大学から七名が参加しました。昨年度からの主な変更点として、発表形式を初日の成果発表部門と翌日のポスター発表部門に分けて実施したこと、さらに座長二名のうち一人を学生が担当したことが挙げられます。成果発表では一人五分、ポスター発表では一人三分の発表が行われ、活発な質疑応答が展開されました。発表会後の懇親会では、昨年同様、大学や基礎・臨床の垣根を越えて交流を深めました。研究成果を人体病理学・病理診断学講座の西山良輝さん、ポ

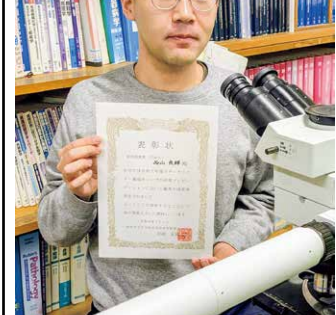
今年度いただいたご意見を踏まえ、臨床研究医養成室を中心に事業内容の改善・充実を進めて参ります。なお、本キャンプは今後も年一回の開催を予定しており、次回も同会場での開催を計画しています。MSA活動に対し、学内各講座より多大なるご支援をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。引き続き、本事業へのご支援・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。



国立大学法人秋田大学 国立大学法人弘前大学 令和7年度 リサーチドクター養成キャンプ

研究結果発表の場として、令和八年二月二十八日から三月一日にかけて、昨年度に引き続き秋田大学と合同によるリサーチドクター養成キャンプを秋田県大潟村にて開催しました。今年度は参加者が大幅に増加し、学生は秋田大学から三十二名、弘前大学から二十九名、教員は秋田大学から二十七名、弘前大学から七名が参加しました。昨年度からの主な変更点として、発表形式を初日の成果発表部門と翌日のポスター発表部門に分けて実施したこと、さらに座長二名のうち一人を学生が担当したことが挙げられます。成果発表では一人五分、ポスター発表では一人三分の発表が行われ、活発な質疑応答が展開されました。発表会後の懇親会では、昨年同様、大学や基礎・臨床の垣根を越えて交流を深めました。研究成果を人体病理学・病理診断学講座の西山良輝さん、ポ

この度、文部科学省高度医療人材養成拠点事業として引き続き秋田大学と合同によるリサーチドクター養成キャンプにおいて、令和六年度に続き研究成果をいただきました、大変光栄に存じます。本研究では、予後不良な悪性腫瘍である膵臓癌を対象に、術前補助化学療法後の腫瘍微小環境に着目し、免疫細胞浸潤と腫瘍血管形態を、病理学的観点から解析しています。これまでの検討から、術前補助化学療法により免疫細胞集団が抗腫瘍的な方向へ変化し、その背景に血管構築の変化が関与する可能性が示唆されました。秋田大学・弘前大学の先生方、ならびに医学部生の皆様と、学会さながらの議論を通じて研究の意義や課題を見つめ直す本機会は、将来、腫瘍内科を軸に基礎と臨床を橋渡しするPhysician-



今年度いただいたご意見を踏まえ、臨床研究医養成室を中心に事業内容の改善・充実を進めて参ります。なお、本キャンプは今後も年一回の開催を予定しており、次回も同会場での開催を計画しています。MSA活動に対し、学内各講座より多大なるご支援をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。引き続き、本事業へのご支援・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

「成果発表部門」優秀賞を受賞して

医学部4年 西山良輝

この度、文部科学省高度医療人材養成拠点事業として、大きな財産となりました。恵まれた環境で日々学べることへの感謝を忘れず、理想の医師像を実現し、がんで苦しむ方が少しでも減る社会の実現に貢献すべく、今後も精進して参ります。最後になりますが、日々ご指導いただいております吉澤忠司先生をはじめ人体病理学・病理診断学講座の先生方、臨床的観点から貴重なご助言をいただいております消化器外科学講座の先生方、ならびにこのような機会を設けてくださった両大学の教職員の皆様、心より御礼申し上げます。

令和七年度 リサーチドクター養成キャンペーン 「ポスター発表部門」 優秀賞を受賞して

医学部3年 櫻田史彦

私は、本態性振戦（上肢や頭部に原因不明の震えが生じる疾患）に対する新規治療薬の探索をテーマに、候補化合物の効果を評価するための細胞株の樹立や曝露試験を行いました。

医療を支える技術や治療法は、多くの基礎研究の積み重ねによって生まれています。私は将来、臨床に軸足を置きながらも研究と日常に関わり、医学の発展に貢献できるよう、研究手法を学びたいと思ったことが、MSAに応募したきっかけでした。

今年度は自分で研究の見通しを立てながら、より主体的に取り組んでいきたいと考えています。

今回ポスター賞をいただいたのは、ご指導いただいた上野教授、古川准教授、下山助教をはじめ、一緒に研究した同級生、助言をくださった先輩方、そしてMSAの機会を作ってくださった先生方・大学職員の皆様のおかげです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



令和七年度リサーチドクター養成キャンペーン 「ポスター発表部門」 優秀賞を受賞して

医学部4年 松浦琢真

この度、令和七年度リサーチドクター養成キャンペーンにて、ポスター賞（臨床部門）をいただきました。弘前大学医学部医学科四年の松浦琢真です。

このような賞をいただき、誠に光栄に存じます。臨床研究医養成室の皆様をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

また、消化器血液免疫内科学講座の太田真二先生、櫻庭裕丈先生、村井康久先生には、多大なるご指導に加え、貴重な機会を数多く

与えていただきました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

今回初めての参加でしたが、大潟村でのリサーチドクター養成キャンペーンの規模の大きさに圧倒されるとともに、参加者の皆様による質の高い発表に大きな刺激を受けました。また、合宿形式ということもあり、先



第39回日本糖尿病・肥満動物学会 米田賞を受賞して

分子病態病理学講座 水上浩哉

このたび、第三十九回日本糖尿病・肥満動物学会年次学術集会において米田賞を受賞させていただきました。日本糖尿病・肥満動物学会は日本糖尿病学会の分会の一つで、糖尿病動物研究に特化したマニアックな学会です。そのレベルは高く、年次学術集会では日本の主な糖尿病研究者が集結し、活発な議論が行われます。本賞は、その中でも糖尿病・肥満研究分野において学術業績が卓越し、かつ指導的立場で学会活動に精励している研究者一名に各年度で授与されるもので、今回受賞出来たことを大変光栄に思っております。受賞題名は「病理学的探索による糖尿病病態の解明」です。分子病態病理学講座では、糖尿病に伴って生じる組織や細胞の変化を病理学的な視点から解析し、その進行や合併症発症の仕組みを明らかにすることを目的として研究を行ってまいりました。本邦において糖尿病を専門



生方や他のMSAの方々と対話する機会にも恵まれ、今後の進路や研究に対する多様な考えに触れる中で、自身の視野が大きく広がるのを感じております。今回の経験を糧に、今後の学業および研究活動に一層邁進していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

的に研究しているのは我々の講座のみであり、その独自性は非常に高いと考えています。糖尿病は血糖値の異常として捉えられがちですが、その背景では膵臓や他の組織にさまざまな組織学的変化を生じています。これまで、マウス・ラットに加え剖検標本を用いた豚島の病理学的解析、糖尿病性神経障害の発症機序解明を中心に研究を進めてまいりました。特に、糖尿病性神経障害においてはその病態における炎症の関与、逆行性軸索輸送の減弱など様々な新しい機序を解明してまいりました。それだけでなく、岩木健康増進プロジェクトにも参画し、PINT法による痛覚測定を行っております。痛覚閾値は早期の糖尿病性神経障害の病態でもある小径神経障害を反映しております。その発症促進因子をビッグデータをを用いて解析し、腸内細菌叢やトリプトファン代謝の変化といった新たな病態を見出しています。ま

第39回日本糖尿病・肥満動物学会 学生優秀賞を受賞して

附属病院/内分内分泌科、糖尿病代謝内科
病院助手 樽澤武房

た、消化器外科科学講座や耳鼻咽喉科学講座と共同研究を行い、糖尿病と癌の関係についても病理学的に解析を行っております。特に膵導管癌と糖尿病の関連において、糖尿病による後天的遺伝子修飾の変化が組織型や予後を悪化させるという機序を複数明らかにしてきました。

した。これらの研究は、講座の方々、大学院生、共同研究者の皆様の支えによって成し遂げられたものです。心より感謝申し上げます。今後とも病理学の立場から、基礎から臨床応用へとつながる糖尿病研究を進展させていきたいと考えています。

このたび、名古屋市中で開催された第三十九回日本糖尿病・肥満動物学会学術集会において、「極長鎖脂肪酸はストレプトゾトシン誘発糖尿病マウスの神経障害を抑制する」という演題で、学生優秀賞を受賞いたしました。本学会は、糖尿病・肥満症の病態解明や新規治療法について、動物モデルを用いて議論する全国学会です。

糖尿病性神経障害は、糖尿病に高頻度に合併し、手足のしびれや痛み、感覚低下を引き起こします。進行すると突然死にも関わる重要な病態ですが、根本的治療は限られています。私たちは予備的検討から、インスリン欠乏糖尿病モデルマウスに高脂肪食を投与すると、神経伝導速度の低下や神経線維の脱落が抑制されることを見出していました。

そこで本研究では、高脂肪食による神経内代謝の変化を調べ、坐骨神経のメタボローム解析を行いま



これらを踏まえ、本研究ではさらに、極長鎖脂肪酸をインスリン欠乏糖尿病モデルマウスに投与する実験を行いました。その結果、神経伝導速度の低下が抑制され、表皮内の神経線維脱落も軽減することを明らかにしました。加えて、シユワン細胞株MS12C3に極長鎖脂肪酸を投与すると、ペルオキシソームの増加と細胞



増殖促進が認められました。これらの結果から、極長鎖脂肪酸がペルオキシソームを介して末梢神経を保護し、糖尿病性神経障害を抑制する可能性が示唆されました。一方で、その詳細な分子メカニズムは未解明です。ペルオキシソームはミトコンドリアや小胞体と相互作用しながら細胞ストレス応答に関与している可能性があり、今後はこれらの細胞内ネットワークに着目して解析を進め、病態解明や新規治療法開発につなげていきたいと考えています。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導くださいました藤田征弘教授、水上浩哉教授をはじめ、多くの先生方、スタッフの皆様にご心より御礼申し上げます。研究に用いた動物への感謝と敬意を忘れず、今後も誠実に研究に取り組んでまいります。



受賞報告

日本癌治療学会 トラベルグラントを受賞して

むつ下北地域医療学講座
講師 藤田尚紀

この度、二〇二五年十二月五日〜七日にシンガポールで開催されたEuropean Society for Medical Oncology (ESMO) Asia 2025において日本癌治療学会トラベルグラントを賜り、誠に光栄に存じます。本賞の選考には、これまでのInternational Journal of Clinical Oncologyへの論文掲載実績や、日本癌治療学会学術集会における演題発表数が大きく影響していると同っております。これまで継続的に研究成果を発信し、演題登録を重ねてきた取り組みが評価されたものと受け止めており、大変励みとなりました。

今回の応募の目的は、自身の研究成果を国際舞台で発表するとともに、最新の知見を吸収することに加え、トラベルグラント受賞者同士の交流を通じて新たな研究ネットワークを構築することにあります。同じく受賞された京都大学外科領域の先生方と密な飲み込みにケーションの機会を得ることができ、それぞれの研究テーマや所属施設の現状、今後の研究展望について率直に議論することができ、大変有意義な時間となりました。今後、こうした縁が異分野共同研究へと発展していくことを期待しております。

さらに、日本癌治療学会が募集するトラベルグラントとして、American Society of Clinical Oncology (ASCO) Annual MeetingおよびASCO Breakthrough (いずれも二〇二六年度)にも採択いただきました。これまで泌尿器科領域内での交流は比較的多く経験してまいりましたが、他科、特にトップレベルの研究者との直接的な交流の機会は限られており、本トラベルグラントはその貴重な機会を提供してくれるものと感じております。今後はこう



今回の研究テーマは、「Ⅲ期肺非小細胞肺癌に対する放射線治療前の好中球/リンパ球比を用いた予後予測に関する検討」です。好中球/リンパ球比 (Neutrophil-lymphocyte ratio : NLR)

受賞報告

第153回日本放射線医学会北日本地方会 優秀演題賞を受賞して

附属病院 放射線治療科
病院助手 奈良岡春希

このたびこのような栄誉ある賞を賜ることができ深く感謝申し上げます。

今回このような形で原稿を書く機会をいただきましたので、本研究の簡単なご紹介をさせていただきます。

は全身性炎症を反映する指標のひとつとして知られており、多くの癌種で予後に関連すると報告されています。この指標を用いて今回のテーマについて研究を行い、全生存率と無増悪生存率について検討したところ、カットオフ値を上回る群にて無増悪生存率が有意に不良という結果となりました。これらの結果を踏まえて好中球の働きである腫瘍関連好中球という側面が、活性酸素産生による癌

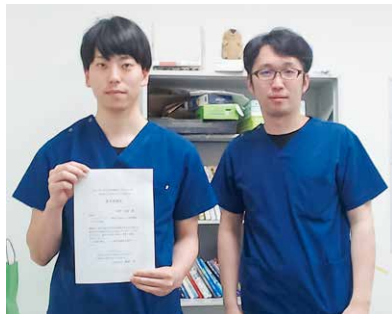
受賞報告

第153回日本放射線医学会北日本地方会 優秀演題賞を受賞して

むつ総合病院 放射線科
大学院2年 宿野部 晨

この度、第百五十三回日本放射線医学会北日本地方会において、「トリプルネットワーク構造的共変動による認知機能低下の予測的価値」と題した演題を発表し、優秀演題賞を受賞いたしました。このような名誉ある賞を賜ったことを大変光栄に思い、ここに受賞のご報告を申し上げます。

超高齢化社会を迎えたわが国において、認知症の早期予測と予防は喫緊の社会的課題です。今回の発表では、弘前大学が実施する大規模健康調査「いきいき健診」の参加者を対象に、脳の三大ネットワーク (default mode network [DMN]・central executive network [CEAN]・salience network [SN])の構造的共変動が、六年後の認知機能低下を予



化の促進、各種、タンパク質や分解酵素の産生による腫瘍血管新生の促進、好中球細胞外トラップの放出による転移の促進といった働きに参与していることから、好中球数が優位であることが癌の増殖・転移が促進されている環境にあると考えられます。

対象患者の選定や対象期間をさらに適切に設定することによってさらなる精度の高い結果を得られることが想定され、また異なる癌腫に対して好中球の働きを踏まえて用いることが可能ではないか、というような今後のさらなる研究の幅が広がる

受賞報告

ESSKA congress 2026 ESSKA Basic Scientist Abstract Awardを受賞して

弘前記念病院 整形外科
客員研究員 山内翔平

程の理解においても意義深いものと考えております。私は現在むつ総合病院に勤務しており、大学院から地理的に離れた環境での研究・論文執筆となりました。それでも、掛田教授をはじめ弘前大学放射線診断学講座の先生方との定期的な遠隔カンファレンスを通じて、研究の方向性から発表準備の細部に至るまで、一貫して丁寧なご指導をいただくことができました。画面越しでありながら議論は常に実りあるもので、遠隔という状況をほとんど感じさせない恵まれた環境を与

えていただきました。赴任先でもこうして研究・論文執筆を続けられたことは、かけがえのない経験として今後の大きな糧になっています。

本演題の発表にあたり、終始懇切丁寧なご指導・ご鞭撻を賜りました掛田教授、京都府立医科大学 渡邊講師、COIの先生方に、心より深く御礼申し上げます。今回の受賞を励みとして、臨床と研究の両面でさらに精進し、認知症の早期発見・予防に少しでも貢献できるよう努めてまいります。

この度、チェロ・プラハで開催された22nd Congress of the European Society of Sports Traumatology, Knee Surgery and Arthroscopy (ESSKA) 2026において、ESSKA Basic Scientist Abstract Awardを受賞いたしました。本賞は優れた基礎研究抄録に対して授与されるもので、今回、四名の受賞者の一人として選出されました。ESSKAはスポーツ外傷、膝関節外科、関節鏡手術の分野を牽引する国際学会です。隔年で開催されるESSKA Congressは、前回現地で開催された際に約四千五百名



が参加した、スポーツ整形外科領域で世界最大規模の国際学会の一つです。そのような国際的な舞台で受賞できたことを大変光栄に感じております。今回の受賞演題は「Trade-Off Between Isometry and Elongation in Lateral Extra-

Articular Tendosis」です。近年、膝前十字靭帯 (ACL)再建術に、前外側回旋不安定性を抑える外側関節外腱固定術 (LET) を追加する有効性が報告されています。LETは、腸脛靭帯の一部を用いて膝外側から回旋不安定性を制御する手術手技であり、再建靭帯が再び損傷するリスクを下げると同時に、固定位置によっては膝関節の動きを過度に制限し、軟骨変性につながる可能性があります。そのため、LETを安全かつ効果的に行うためには、大腿骨側の固定位置の設定が重要な課題となります。

(前ページより)
し、患者ごとの体格や骨形態に合わせた、より安全な手術戦略の選択につなげたいと考えています。本研究は、留学先である米国ピッツバーグ大学Biodynamics Laboratoryにおいて実施したものです。留学の機会を

与えていただいた石橋教授をはじめとする整形外科講義の先生方に心より感謝申し上げます。今回の受賞を励みに、基礎研究の成果を臨床に還元できるように、今後も研究を積み重ねてまいります。

受賞報告
第103回日本病理学会東北支部学術集会
若手最優秀演題賞を受賞して
人体病理学・病理診断学講座
医学科4年 石岡 佑 紳

この度、二〇二六年二月十四・十五日に、宮城県仙台市の東北大学医学部長隆会館で開催された第百三回日本病理学会東北支部学術集会におきまして、若手最優秀演題賞をいただきましたことを報告いたします。

私は、三年度後期の研究室研修で人体病理学・病理診断学講座にお世話になりました。研修期間が終了した後も継続してご指導いただき、今回、小児の軟部腫瘍の症例について学会発表する機会をいただきました。今回の経験を通過して、軟部腫瘍の診断は臨床的にも病理学的にも非常に難しく、病理標本だけではなく放射線画像所見などもあわせて統合的に診断することが重要であるという実例を学ぶことができました。特に術前の病理診断は、生検に



よって腫瘍の一部分のみを採取して評価を行うため、軟部腫瘍のように多彩な内部構造を持つ腫瘍では全体の把握が難しい場合があります。そのため、画像所見も踏まえて病変全体を評価することが非常に重要になります。

これまで、学会に参加した経験はあったものの、自ら演者として発表を行うのは今回が初めてであり、準備を進める中で自身の知識不足を痛感しました。実際の症例に向き合うなかで、免疫組織化学の各種抗体の意義や、鑑別疾患の病態などについて、一から深く調べる必要がありました。さらに、前述したようにMRIなどの画像所見の読み方も併せて学ぶ必要があり、新たに身に付けるべき知識の膨大さに苦労しました。

それでも、一つ一つ丁寧に調べていくことで、少しずつ点が繋がっていき、感覚を得ることができました。学会発表の当日は大きな緊張もありましたが、発表後、会場の先生方から「非常に勉強になった」とのお言葉を多くいただくことが

受賞報告
日本性機能学会 27th World meeting on sexual medicine travel grant を受賞して
泌尿器科学講座
大学院3年 福島 隆 史

この度、ポルトガル・ポルトで開催された第二十七回 World Meeting on Sexual Medicine (WMSM 2025) において Travel Grant を受賞し、学会に参加する機会をいただきました。性医学分野における国際学会であり、勃起障害、男性更年期障害、生殖医療、性機能再建など幅広い領域に関する最新の研究成果が報告されていきました。今回は、「Inflammation and nutrition in relation to erectile function among men undergoing dialysis」という演題で発表させていただきました。透析患者における勃起機能障害の重症度と慢性炎症および栄養状態との関連について検討し、慢性炎症が勃起

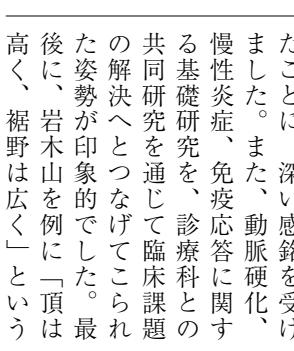
できました。その際、自分の発表の意義を感じるとともに、僅かながらではあります。病理解と奥深い学問へ貢献できた喜びがありました。

今回の発表と受賞にあたっては、多くの方々にお力添えをいただきました。人体病理学・病理診断学講座では、先生方はもちろん、学生の先輩方、同期からも多くのことを教わり、発表練習などにも協力していただきました。特に熱心にご指導くださった後藤先生を始め、お世話になった皆様

に心より感謝申し上げます。今回の貴重で有意義な経験を糧にしなが、引き続き努力してまいります。

機能障害の重症化と関連する可能性が示され、透析患者のQOL向上に向けた新たな知見を得ることができました。学会期間中は、性医学分野における世界各国の研究成果に触れることができ、大変有意義な経験となりました。特に、基礎研究から臨床研究まで幅広いテーマの発表を通じて、現在の研究動向や今後の展望について理解を深めることができました。また、海外の研究者や臨床医との交流を通じて、多様な視点に触れる貴重な機会となりました。

今回の Travel Grant 受賞は大変光栄であり、本研究をご指導いただいた先生方ならびに共同研究者の皆様



に深く感謝申し上げます。この経験を今後の研究活動や臨床診療に活かし、泌尿器科学および性機能医学の発展に貢献できるよう、一層努力してまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

令和七年度 最終講義

- 今泉 忠淳 教授 (血管・炎症医学講座)
- 花田 裕之 教授 (救急災害・総合診療医学講座)
- 袴田 健一 教授 (消化器外科学講座)
- 学務委員長 富田 泰 史 (循環器腎臓内科学講座 教授)

令和七年度最終講義が、令和八年三月九日に医学部講義棟にて行われ(WEBでも配信)、今年度退任される三名の教授、今泉忠淳教授(血管・炎症医学講座)、花田裕之教授(救急災害・総合診療医学講座)、袴田健一教授(消化器外科学講座)が最終講義を担当されました。

今泉忠淳教授による「おかげさまで四十七年」…東京都立府中病院での二年間の臨床研修を経て、当時の弘前大学脳神経血管病態研究施設(脳研)で研究を開始され、米国ユタ大学への五年間の留学経験を含め、血小板活性化因子(PAF)からRIG-Iに至る長年の研究の歩みが紹介されました。特に、RIG-Iがパターン認識受容体として機能することを世界で初めて報告し、自然免疫研究の発展に大きく貢献されてきたことに、深い感銘を受けました。また、動脈硬化、慢性炎症、免疫応答に関する基礎研究を、診療科との共同研究を通じて臨床課題の解決へとつなげてこられた姿勢が印象的でした。最後に、岩木山を例に「頂は高く、裾野は広く」という

研究の理念を示され、リサーチマインドの醸成ならびに若手医師・研究者の育成の重要性を説かれ、四十七年間にわたる研究人生を締めくくられました。

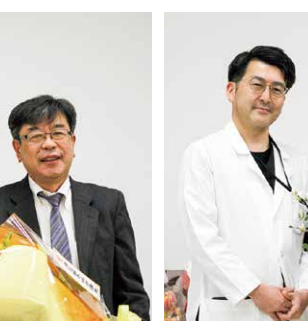
花田裕之教授による「救急と私」…救急ならびに災害医療を中心に、重症患者の救命に向けた合ってこられた長年の歩みが紹介されました。大学院時代から多くの医療機関で臨床の研鑽を積み、心筋梗塞をはじめめとする多数の患者さんを診療してきた経験を踏まえ、実臨床から学ぶことの重要性を説かれました。また、心肺蘇生、PPCPS、ACLS・BLS教育など、救急医療に不可欠な診療体制の整備と人材育成に尽力されたとともに、東日本大震災における岩手県での救援活動や、福島県における被災者医療支援などを通じて、弘前大学の特色である災害・被災者医療の基盤構築に大きく貢献され



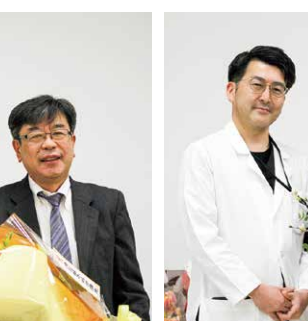
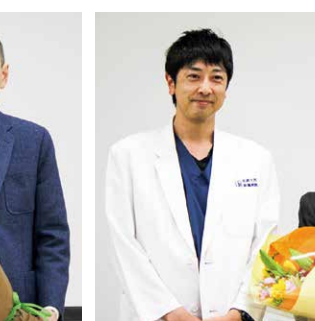
今泉忠淳先生



花田裕之先生



袴田健一先生



ました。さらに、高度救命救急センターの体制整備においては、診療科の垣根を越えた連携の重要性を強調されました。COVID-19対応にも真正面から取り組まれ、地域の実情に即した救急・災害医療システムを築いてこられた姿勢が印象的でした。先生の豊富なご経験に裏打ちされた、まさに臨場感あふれる最終講義でした。

袴田健一教授による「外科学に魅せられて」…沖縄県立中部病院での研修を経て、成人間生体肝移植に携わり、世界最先端の医療を通じて、手術手技、周術期管理、新たな治療法の開発に取り組みでこられた経緯が紹介されました。当時、生体部分肝移植後の世界最長生存であった「ヨロコ」に象徴される研究成果は、その後の臨床応用へとつながり、先生が生体肝移植の発展に大きく貢献されてきたことを強く印象づけるものでした。また、外科医療が開腹手術から低侵襲手術へと大きく変化する中で、機能温存、個別化医療や集学的治療など、臨床現場に根ざした外科医療の進歩に挑戦してこられた歩みが示されました。さらに、海外交流や女性医師のキャリア支援など、時代を先取りした取り組みにも精力的にご

(次ページへ続く)



令和七年度の医学科学学位記伝達式が、令和七年三月二十六日より医学部基礎大講堂にて挙行されました。当日は、福田眞作学長、袴田健一附属病院長、澤田美彦、橋本会理事長のご列席のもと、晴れやかな雰囲気の中で式が始まりました。石

橋本之医学部長から卒業生一人ひとりに学位記が授与されました。医学部長挨拶では、コロナ禍で入学し、多くの困難を乗り越えてきた卒業生への労いとともに、その経験を糧に大きく成長した皆さんの今後の活躍への期待が述べられました。続いて澤田美彦学長からは、「鵬」のごとく力強く羽ばたき、世界を舞台にして大いに活躍してほしいとの思いを込めた温かい祝辞が贈られました。



令和八年度臨床実習生（医学）認定証授与式（旧SD章授与式）が、令和八年二月三日十三時三十分より医学部基礎大講堂にて挙行されました。新五年次学生百十六名が、医の倫理に則って行動することを誓い、「臨床実習生（医学）」とし

ての自覚と責任を胸に、診療参加型臨床実習（Clinical Clerkship）に臨むことを宣言しました。臨床実習においては、患者さんと直接向き合う責任の重さを真摯に受け止め、診療行為を通じて患者さんから医学・医療を学ばせていただくことへの感謝の気持ちを忘れず、医療チームの一員として誠実に行動する姿勢が求められます。

本学における認定証授与式は、共用試験（Computer Based Testing CBT、および Objective Structured Clinical Examination OSCE）が導入された平成十七年度より行われ、今回で二十二回を迎えました。令和六年度からは共用試験の公的化に伴い、医療系大学間共用試験実施評価機構による「臨床実習生（医学）認定証」が交付されています。つまり、この認定証は、臨床実習生（医学）として診療参加型臨床実習に参加する資格を示すとともに、臨床実習開始に必要な知識と技能・態度を

公益社団法人 青森医学振興会

【沿革】 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会「鵬桜医学振興会」発足(任意団体)
 平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立認可
 平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

本会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。

- 医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
- 医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
- 地域医療の振興に寄与する事業への支援
- 海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

◎寄附のお願い

青森県の医学・医療の発展を促進するための各事業活動の一層の充実を図って参りたいので、皆様の格別のご支援・ご協力をよろしくお願ひいたします。随時、ご寄附を受付しております。

本会の公益目的事業に対する寄附金は、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。

なお、本会ホームページ (<https://aomori-mpm.jp/>) から、クレジットカード払いによるご寄附が可能となりました。

◎当会への入会のお願い

会員種別	年会費
医学部教員	1万円
医学部卒業生等	2万円
賛同する個人	2万円
賛同する団体	10万円

当会の事業活動に継続的にご支援・ご協力をいただける方は、ご入会くださるようお願い申し上げます。年会費は次のとおりとなっております。

◎ご支援ご協力いただける方のご連絡をお待ちしております。

▶【問合せ先】 公益社団法人青森医学振興会事務局
 TEL・FAX 0172-40-2872
 学内内線 6519
 E-mail : info@aomori-mpm.jp

令和7年度 医学科学学位記伝達式

学務委員長 富田泰史
 (循環器腎臓内科学講座 教授)

（前ページより）
 尽力されました。上司や同僚、仲間との多くの写真からは、人とのつながりを大切にしながら外科医として歩みを重ねてこられた先生の姿が印象深く伝わってきました。

講義終了後には、三人の先生方それぞれに多くの花束が贈呈され、会場を埋め

た聴衆から盛大な拍手が送られました。最後に石橋恭之医学研究科長より謝辞が述べられ、盛会のうちに最終講義は閉会となりました。令和八年四月から、今泉先生は弘前医療福祉大学保健学部教授として、花田先生は弘前総合医療センター救急指導医として、そして袴田先生は弘前総合医療セ

令和8年度 臨床実習生（医学） 認定証授与式

学務委員長 富田泰史
 (循環器腎臓内科学講座 教授)

ンター院長として、それぞれ新たな立場でご活躍される予定です。長年にわたり、本学ならびに医学研究科の発展に多大なるご貢献を賜りました今泉先生、花田先生、袴田先生に、心より感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導とお力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。

語り合い、今後の進路について語り合うなど、卒業生は限られた時間を惜しむように過ごしていました。謝恩会恒例のビンゴゲームや学長とのジャンケン大会では、会場は大いに盛り上がり、あつという間の二時間となりました。最後に壇上で卒業生から先生方に花束が贈られ、感謝の気持ちとともに

に謝恩会の幕が閉じられました。同級生が集合する機会はおそらくこれが最後になるかもしれません。弘前大学医学部医学科卒業という誇りを胸に、それぞれが今後世界に大きく羽ばたいていくことを、心より願っています。

修得していることを証明するものです。

認定証授与式では、新五年次学生全員が真新しい白衣に身を包み、厳粛な面持ちで式に臨みました。式典では、石橋恭之医学部長および学務委員長から挨拶があり、続いて袴田健一附属病院長より訓示をいただきました。その後、附属病院長から新五年次学生代表の渡谷夢海さんに認定証が授与され、最後に渡谷さんが代表として、以下の「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」を宣誓しました。

「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」

1. 私は、人類への奉仕に自分の人生を捧げることを誓います。
2. 私は、学び得た医学知識をもとに、良心と尊厳をもって医学の務めを果たします。
3. 私は、生命の始まりから人命を最大限に尊重し続けます。また、人間の性の法理に反して医学の知識を用いることはしません。
4. 私は、患者の健康を私の第一の関心事とします。
5. 私は、私への信頼のゆえに知り得た患者の秘密を、たとえその死後においても尊重します。
6. 私は、私を教え導く人々に尊敬と感謝の念を捧げます。
7. 私は、私の自由意志に基づき名誉にかけてこれらのことを厳粛に誓います。

学生たちは、これまで培ってきた知識と技能を基盤として、今後は実際の診療現場において患者さんや多職種との医療スタッフと関わりながら、より実践的な学びを深めていきます。本学では、地域医療を担う次世代医療人の育成を目指し、今後も充実した臨床実習体制の整備と教育の質向上に努めてまいります。



令和8年度

入学試験報告

医学科入試専門委員長 上野 伸哉

(脳神経生理学講座 教授)

令和八年四月一日より、入試専門委員長を脳神経生理学講座上野より、ゲノム生化学講座の藤井穂高教授へ引き継ぐこととなりました。令和八年度の入試動向に関しては、上野より報告します。

接を実施しました。

【志願者・入学者の動向】

本年度の志願者倍率に関して、一般選抜では二段階選抜を八倍程度から六倍への変更したことにより志願者数は減少しました。志願者数は減少しました。志願倍率は五・五九倍で二段階選抜自体は実施しませんでした。総合型選抜の志願倍率はほぼ例年通り、学士編入学では低下傾向が令和六年入試より続いています。令和八年度医学部入試試験において、主な変更点は、一般選抜において二段階選抜の条件、約八倍程度を六倍程度へと変更し、また試験会場を従来の弘前高校から弘前大学医学部施設内に移し、個別選抜試験および個人面接を実施しました。

表1. 志願者倍率 (カッコ内は受験者倍率)

Table with 4 columns: 年度, 総合型選抜 *R2までAO入試, 前期日程, 計. Rows for R2 to R8.

表2. 志願者倍率 学士編入学 (カッコ内は受験者倍率)

Table with 4 columns: 年度, 学士編入学, 年度, 学士編入学. Rows for R2 to R5.

表3. 地域別入学者数 (AO および前期入試の合計)

Table with 6 columns: 年度, 青森県, 東北5県, 北海道, その他, 計. Rows for R2 to R8.

カッコ内は男女比

しています。地域別では、コロナ禍時期に顕著であった、北海道、青森を除く東北五県からの入学者の回復が令和六年度から見られ、本年度も持続している状況です。

二〇〇四年新臨床研修制度開始以降の二十年を振り返る

二〇一六年より医学科入試専門委員長を務め、二〇二六年四月よりゲノム生化学講座の藤井穂高教授へ業務を引き継ぐこととなりました。この節目に、二〇〇四年の新臨床研修制度開始以降、弘前大学医学部医学科の入試制度がどのような課題に直面し、どのような改革を行ってきたのかを振り返りたいと思います。

新臨床研修制度がもたらした転換

二〇〇四年、新臨床研修制度が開始され、若手医師は全国の研修病院を自由に選択できるようになりました。

た。その結果、都市部の大規模病院へ研修医が集中し、地方大学では医局入局者減少が急速に進みました。青森県も例外ではなく、人口当たり医師数は全国平均を下回り、地域医療体制維持が大きな課題となりました。弘前大学医学部でも、将来的に地域医療を支える人材をどのように確保するかが重要な課題となりました。

一般入試改革

二〇〇四年当時、一般入試は前期日程と後期日程の二本立てでした。前期では数学・理科・英語・面接・調書を書き記していました。二〇〇七年には後期日程を廃止し、前期一本化を実施しました。二〇〇九年には地域医療の医師不足への対応の一つとして、青森県地域定着枠を導入しました。二〇一七年には理科試験を廃止し、数学・英語・面接へ変更しました。さらに二〇二一年には、総合問題+面接へ移行し、読解力、分析力、未知の課題への対応力を評価する試験へ変更しました。その後、一般入試、総合型選抜、学士編入学の重点評価項目を再整理し、現在は再び学力重視の試験設計へ再調整し、数学・英語・面接の科目としています。

推薦入試からAO入試、総合型選抜への転換

二〇〇四年当時は推薦入試が行われており、小論文・面接・推薦書・調査書による選抜でした。しかし、より明確に地域医療人材を確保するため、二〇〇九年に推薦入試を廃止しAO入試へ移行しました。AO入試では、青森県内枠、北海道・

東北枠を設定し、模擬講義、筆記試験、ワークシヨップ、ケーススタディ、面接を組み合わせた全国的にも特徴的な多面的選抜を導入しました。この制度設計では、当時総合診療部の加藤博之教授に大きなご尽力をいただきました。二〇二一年にはCOVID-19への対応もあり、AO入試を総合型選抜へ改編し、共通テスト中心とした制度へ再構築しました。現在総合型選抜はすべて地域枠であり、要件として、卒業後直ちに青森県キャリア形成プログラムに従って臨床研修を含む九年間(うち四年間は医師の不足している地域)医療に従事することが定められています。

学士編入学制度の発展

二〇〇三年に開始された学士編入学制度は、多様な背景を持つ人材を医学界に迎える重要な制度でした。当初は三年次編入として開始されましたが、その後二年次後期編入、さらに二年次前期編入へ変更され、通常カリキュラムとの接続を改善しました。地域枠導入も試みられましたが、制度上の課題もあり、現在は大学独自枠として卒後二年間の弘前大学関連施設での臨床研修を要件として運用されています。

定員増と地域枠拡大

全国的な医師不足対策として医学部定員増が進められ、弘前大学でも百名から最大百四十五名まで定員増が行われました。その後百三十二名体制へ移行し、地域定着枠の拡充が進められました。

COVID-19対応

COVID-19流行時には、対面型試験実施そのものが困難となりました。感染対策、公平性確保、試験方式変更など多くの対応が必要でした。ワークシヨップ中止、試験内容簡素化などを行いながら入試を継続しました。

最後に 前入試専門委員長 長 病理生命科学講座 鬼島 宏教授(当時)より引き続き、十年間委員長を務めました。新臨床制度のもと、地域枠の導入による入試形態自体の調整、各入試形態での科目、選考方法の変更など試行錯誤の連続でした。また新型コロナウイルスへの対策におられるなど、教員、学務を中心とした事務の方々へ多大なご負担をかけた日々でした。特に、推薦入試からAO入試への転換の際に総合型選抜への改革に際して、総合診療部の加藤博之教授(当時)には、選抜方式の構成、内容、実施にあたり多大なご尽力をいただきました。医療情報部の佐々木賀広教授(当時)には、入試選抜にかかる選抜試験の有効性、入学後の動向を解析いただき、入試改革に役立てることができました。この二十年の変遷を見ると頻繁に変更を繰り返したように見えるかもしれませんが、しかしながら今後も社会環境の変化に応じて制度改革は必須です。その目的は「良い学生を迎え、地域医療と医学研究を担う人材を育てること」です。入試専門委員会にて多くの議論および多くの教員の先生方の入試問題作成、面接、入試監督、事務の方々の入試業務への協力のもと乗り切れたことをここに深謝いたします。

第120回医師国家試験結果ならびに令和7年度卒業生の進路状況

学務副委員長 三上 達也 (先制医療学講座 教授)

令和八年二月に実施された第百二十回医師国家試験の結果が公表されました。全体の受験者数は九千九百八十人(うち新卒九千二百五人)、合格者数は九千二百三十九人(同八千七百十六人)であり、合格率は九一・六%(同九四・七%)でした。設置主体別の新卒者の合格率は、国立九五・九%、公立九六・四%、私立九四・六%でした。本学の受験者数は百二十四人(うち新卒百十三人、既卒十一人)、(次ページへ続く)

R2~R7 卒業生進路状況

Table with 7 columns: 年度, 卒業生進路, 人数, %. Rows for R2 to R7 and 合計.

(前ページより)
合格者数百十七人(新卒百十二人、既卒五人)、合格率は九四・四%(新卒九九・一%、既卒四四・五%)でありました。昨年、第百十五回(令和三年二月実施)以来、四年ぶりに合格率が全国平均を上回ったことをお伝えしておりましたが、今年はそのをはるかに上回り、新卒者に限れば全国五位と素晴らしい結果になりました。医学科では、留級者に対する面談を学務委員が実施しているほか、国家試験対策として、費用を支援したうえで十一月に実施する模擬試験を全員に受験してもらい、その結果が芳しくない学生の面談(国家試験に向けての激励!)も新たに実施しております。令和八年度からは、教育カリキュラムを変更しておりますが、今後も既卒者の頑張りも期待するとともに、医師国家試験合格向上に向けた対策を行ってまいります。

次に、令和七年度卒業生の進路状況をご報告いたします。詳細は添付の表をご覧ください。ただ、これだけではとろい、青森県内は六十一人(五四・九%)と昨年の五八・一%よりやや少ない結果になりました。詳細な理由は不明ですが、近畿以西での研修は一人もいない結果となり、東京を含む関東は例年通りと言えますので、北海道と青森県以外の東北での研修が多い結果となりました。

既に初期研修が始まっておりますので、研修先の先生方におかれましてはご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。本学卒業生の益々のご健勝とご発展を祈念しております。

青森県知事と新入生の懇談会

学務委員長 富田 泰史
(循環器腎臓内科学講座 教授)

令和八年四月八日十八時より、医学部基礎大講堂にて、宮下宗一郎青森県知事と弘前大学医学部医学科新入生との懇談会が開催されました。この懇談会は平成十七年に始まり、以降二十年にわたり継続して実施されており、県知事と医学生との直接対話の場として、全国的にも極めて貴重な取り組みとなっております。春には新入生を、秋には五年



生を対象として開催されており、新入生との懇談会としては、宮下知事の就任後三回目の開催となりました。当日は、宮下知事のほか、秋野桂健康医療福祉部長、藤野安弘良医療育成支援特別顧問ら県の関係者も出席し、福田眞作学長、石橋恭之医学部長、横山良仁附属病院長の列席のもと、学務委員長の司会で行われました。懇談会の冒頭では、宮下



知事より、新入生への温かいメッセージを込めたご講演をいただきました。知事はこの懇談会を「どんな医師になりたいのか?」を考える契機にしてほしいと述べられました。青森県では人口減少が進む一方で、高齢者人口は変わらず、地域医療を支える一人ひとりの医師の役割は、これまで以上に重要になってきていること、また県民の医師に寄せる期待は、人口の多い地域とは比較にならないほど大きいこと

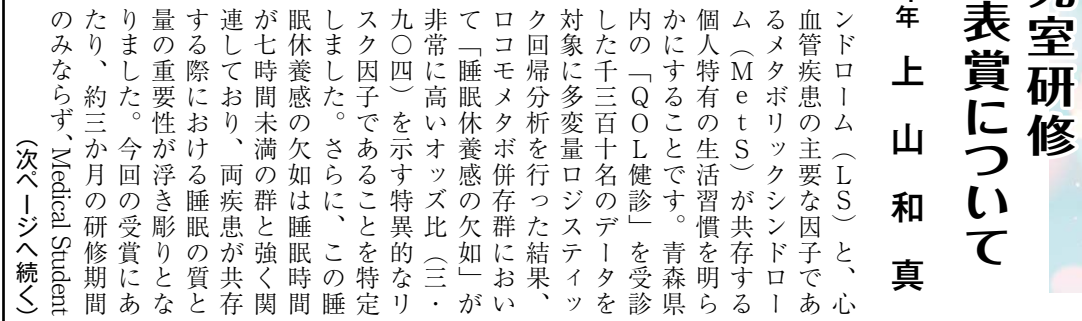
とを強調されました。さらに知事は新入生に対し、「初心を忘れずに」、医学部入学時の志を大きく育ててほしいと呼びかけるとともに、「医師の一言によって救われる患者さんやご家族がいることを忘れないでほしい」と、真摯で熱意あふれるメッセージを送られました。講演後には新入生との懇談が行われました。「短命県返上に向けた県の取り組みは?」との質問に対し、知事は「医療が担うべきことと行政が担うべきことを明確にし、それぞれの役割を着実に果たすことが重要である」と述べられ、生活習慣病対策をはじめとする県の取り組みについて説明されました。懇談会は終始和やかな雰囲気の中で行われ



令和七年度の研究室研修はカリキュラムの変更により、これまでの半年間から、十月から十二月の三か月間、三年生が各講座に週三日間午後配属され行われました。時間外で学生の皆さんが研究を実際におこない、さらに、指導する教員に時間をとっていただくことは日常業務を考えると難しいところがあります。それに対し、研究室研修ではカリキュラムとして教員から研究指導を受けることができると、学生の皆さんにとって非常に貴重な機会です。医学英語Ⅲの授業もその内容に含まれていることから、英語で研究成果を発表すること、英語の抄録、短い論文形式のレポートを提出してもらい、今後の研究発表の模擬体験としては優れているカリキュラムであると思えます。今年度の発表会は十二月二十四日から三日間行われました。各講座から推薦していただいた二人の審査員の先生方にそれぞれ採点していただきました。学生皆さんに会場へ

れ、県の職員の方々も交えて活発な意見交換がなされ、新入生にとって大変有意義な時間となりました。本年四月には、地域医療の維持・確保に向けて、青森県、弘前大学、県立中央病院の三者による「地域総合診療センター」が設立されました。同センターは、県内の地域医療を将来にわ

たって支える新たな仕組みとして、大きな期待が寄せられています。今後も青森県との緊密な連携のもと、多くの新入生が弘前大学のスローガンである「世界に発信し、地域と共に創造する」の精神を体現し、青森県の地域医療のさらなる充実に貢献してくれることを期待しています。

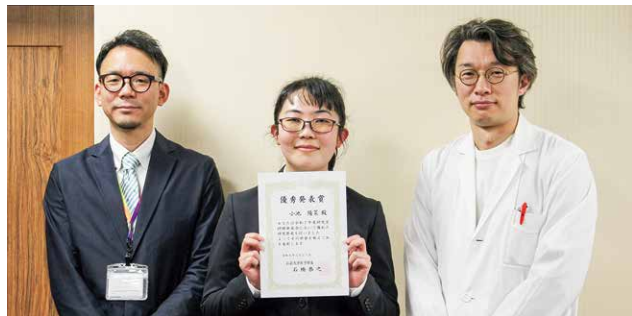


この度は、研究室研修優秀発表賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。私は今回、健康未来イノベーションセンターにおいて「Risk Factors of the Coexistence of Locomotive Syndrome and Metabolic Syndrome」というテーマで研究に取り組みました。本研究の目的は、要介護リスクを高めるロコモティブシンドローム(LS)と、心血管疾患の主要な因子であるメタボリックシンドローム(MetS)が共存する個人特有の生活習慣を明らかにすることです。青森県内の「QOL健診」を受診した千三百十名のデータを対象に多変量ロジスティック回帰分析を行った結果、ロコモティブ併存群において「睡眠休養感の欠如」が非常に高いオッズ比(三・九〇四)を示す特異的なリスク因子であることを特定しました。さらに、この睡眠休養感の欠如は睡眠時間が七時間未満の群と強く関連しており、両疾患が共存する際における睡眠の質と量の重要性が浮き彫りとなりました。今回の受賞に当たり、約三か月の研修期間のみならず、Medical Student

研究室研修優秀発表賞とさせていただきます。いづれも素晴らしい発表、抄録、論文でした。弘前大学は「We are」に採択され、研究大学として位置

りました。私の感想ですが、発表に際し原稿を読むのではなく暗記を、また可能ならば英語による質疑応答もできたらよりよくなると思えました。審査員の先生方による発表の採点結果を中心、評価点が高かった先制医療学講座で研修した上山和真さん、人体病理学・病理診断学講座で研修した西山良輝さん、麻酔科学講座で研修した小池陽菜さんの三人を研究室研修優秀発表賞とさせていただきます。いづれも素晴らしい発表、抄録、論文でした。弘前大学は「We are」に採択され、研究大学として位置

づけられております。研究大学としての地位を維持するのに必要な psychiatric 領域を増やすためにも、このような取り組みを通じて多くの学生の皆さんに研究の楽しさを知ってもらいたいと思えます。また、医学研究科の各講座に興味を持ってもらい、一人でも多くの方が弘前大学で将来研究してほしいと思えます。研究室研修の実施にあたり、各講座の指導教官の先生方には忙しい中、学生の皆さんを指導していただき厚く御礼を申し上げます。どうもありがとうございます。



このたび、研究室研修優秀発表賞をいただくことができましたことを大変光栄に思います。

麻酔科学講座の二階堂先生には、論文の読み方や研究の基礎的な手法から発表資料の作成、聞き手に伝えるための話し方に至るまで

このたび、研究室研修優秀発表賞をいただくことができましたことを大変光栄に思います。

麻酔科学講座の二階堂先生には、論文の読み方や研究の基礎的な手法から発表資料の作成、聞き手に伝えるための話し方に至るまで

医学科4年 小池 陽菜

令和7年度 研究室研修 および優秀発表賞について

（前ページより）Assistant (MSA)として長期にわたり熱心かつ細やかなご指導を賜りました田中直先生、ならびに三上先生をはじめとした健康未来イノベーションセンターの先生方、スタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。MSAとして継続的に研究に関わらせていただいた経験こそが、データの深い理解と今回の成果に繋がったと確信しています。

研究活動を通じて、膨大なデータの中に隠れた真実

を試行錯誤しながら探求する面白さを知りました。本研究は横断研究であるため因果関係までは不明であり、依然として研究の余地が多分に残されています。今後は、睡眠の改善がLSやMETSの予防に寄与するかを検証する縦断的な調査など、さらなる発展が期待されます。今回の経験で得た学びを大切に、常に探究心を持ち続ける医師を目指して、より一層精進してまいります。

令和7年度 研究室研修 優秀発表賞を受賞して

医学科4年 西山 良輝

この度、三年度研究室研修において優秀発表賞をいただき、大変光栄に存じます。発表題目は「Histopathological and Immune-Vascular Changes after Neoadjuvant Chemotherapy in Pancreatic Cancer (膵臓癌における術前補助化学療法に関連する病理組織学的反応および免疫・血管変化)」です。膵臓癌は依然として予後不良な悪性腫瘍の一つであり、近年、術前補助化学療法により生存期間の改善が報告されています。一方で、その効果を支える病理学的根拠、特に腫瘍微小環境の変化には、未

こうした背景のもと、吉澤忠司先生のご指導のもとで立ち上げました。私自身、両親ががんを罹患し、また多くの大切な方々をがんで失ってきた経験から、がんにより命や何気ない日常生活を奪われる方を一人でも減らしたいという一心で、日々研究に取り組んでいます。将来は腫瘍内科医として臨床に携わり、臨床で得た疑



とても丁寧にご指導いただきました。先生の指導にあつての受賞であると強く思います。改めて、心より感謝申し上げます。

今回の研修では、岩木健診ビッグデータを用いて高齢者における睡眠と抑うつ傾向の関係を探るという研究を行いました。睡眠と健康状態の関係というのはさまざまな角度から研究されているテーマのひとつであり、しかし未だその全貌は明らかになっていません。逆に言えば、それらを解明することがうつや認知症の予防改善、ひいては人々の健康寿命を伸ばすことにつながりうることも考えられます。

私の研究は、睡眠について主観的な観点と客観的な測定値をもとに評価し、それらと抑うつ傾向の有無を示す指標の関係性を分析、抑うつ傾向とより強く関わる項目を導き出すものです。

岩木健診で収集されるビッグデータは項目も膨大で、解析にあたってより多くの情報を参照することが有意義のように思っています。しかし、何を知らたいのか、何を必要として

【表】令和7年度 弘前大学学生表彰 (医学部医学科分)

課外活動で特に顕著な功績があった団体 (団体優勝)	
水泳部 (全62名、他学部を含む)	表彰に関する活動 「第18回北部学生選手権水泳競技大会」(2025年6月28~29日、秋田市) 弘前大学女子チームは総合成績で137.5点を獲得し、見事第1位(優勝)に輝きました。
貢献した医学科学生	高見一葉(1年)、張間 蓮(3年)、安藤舞佳(5年)
弓道部 (全45名、他学部を含む)	
表彰に関する活動	「第55回東北地区秋季女子学生弓道大会I部リーグ戦」(2025年10月11~12日、仙台市) 弘前大学が4勝、総的中数151中で優勝を果たしました。
貢献した医学科学生	西澤七海(1年)
課外活動で特に顕著な功績があった学生 (個人優勝)	
平山 茜 (5年)	表彰に関する活動 2024年11月17日に韓国・済州特別自治道(済州島)で開催された「済州みかん国際マラソン」フル女子の部において優勝しました。

※学年は表彰時点のものを記載

弘前大学では、毎年、研究活動・社会活動・課外活動において優れた成果を挙げた学生および団体を表彰しています。二〇二六(令和八)年三月三日には、大学会館にて学生表彰式が行われました。本稿では、令

令和7年度 弘前大学学生表彰 教育委員会委員 浅野 クリスナ (感染症体防御学講座 教授)

令和7年度 弘前大学学生表彰

間を基礎研究に落とし込み、研究を通じて臨床につなぐ、いわゆるトランスレーショナル・リサーチを行う医師を目指しています。私は大学院を修了後、医学科に編入し今日に至ります。研究成果の背景には数多くの地道な作業と試行錯誤があり、それこそが研究の難しさであり醍醐味であると考えています。そのため、医学科

三年次の段階で研究に深く触れることができる本カリキュラムは、我々学生にとって非常に意義深い機会であり、将来の進路選択に幅を持たせうるものであると身をもって実感した次第です。今後も、感謝を忘れず、医学と研究の双方に真摯に向き合ってまいります。本研修で報告した成果は、現在、論文投稿に向けた段階に進



毎年四月二日は、国連総会で決議された「世界自閉症啓発デー」です。この日は世界各地で自閉症への理解を深めるための啓発活動が行われております。当講座においても、平成二十五年より弘前市や弘前市教育委員会にご後援いただき、弘前自閉症児者親の会と合同で特別講演会を開催しています。

第十四回目を迎えた本年は、四月九日(木)に本学医学部コミュニケーションセンターにおいて特別講演会を開催いたしました。講師には、関西福祉科学大学大学院・心理学部の櫻井秀雄教授をお招きし、「アスカ流星群・友だち作りの心理学」スベクトラムで行



第14回世界自閉症啓発デー 特別講演会 in 弘前 神経精神医学講座 教授 中村 和彦

こう！発達特性を活かしたペア・ワークプログラムを通して他者との関係を築き仲間・友人関係へと発展させることが自尊感情の維持・向上につながる可能性を巡って」という演題で講演いただきました。

櫻井先生は二〇〇四年に奈良県高機能自閉症児・者の会「アスカ」を設立され、二十年以上にわたり自閉スペクトラム症児者のためのグループ余暇活動を支援されています。講演では、当事者の豊富な知識や興味関心をポジティブに活用したプログラムの活動内容を楽しくご紹介いただきました。共通の趣味を通じて仲間を見つけ、自分と他者の違いを認め合いながら自尊感情を育むプロセスは、非常に示唆に富むものでした。また、こうした活動を通じて「居場所」と「所属感」を得る重要性は、当事者のみならず

(次ページへ続く)

(前ページより)
 らず大学生を含むすべての若者にとっても共通する課題であるというお話が大変印象的でした。
 当日は弘前市福祉部長の



秋田美織様よりご来賓の挨拶を賜りました。会場には例年以上に多くの学生が参加し、熱心な質疑応答が交わされるなど、次代を担う若い世代の関心の高さが伺えたことは非常に喜ばしい限りです。また、例年通り弘前市のご後援により弘前城天守閣のブルーライトアップも実施していただきました。

本講演会とライトアップを通じて、一人でも多くの方が自閉スペクトラム症について知り、共に歩む社会について考える機会となれば幸いです。最後になりましたが、開催にあたりご協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

学生だよ

一年間を振り返って

一年間を振り返って

医学科3年 河合 玄士

二年生が上がってすぐに解剖学実習が始まり、日常では決して経験することのできない刺激的な日々が続いた。実習と試験の連続に心身共に疲弊する場面もあったが、それ以上に得るものが大きく、非常に充実した時間だったと感じている。医学を学ぶ者として貴重な機会を与えてくださったご献体の方々と、その実習を支えてくださったすべての方々に深く感謝したい。また、解剖学実習は班単位で行われるため、個人の働きだけでは成り立たなかつ

た。互いに知識を共有し、役割を分担しながら進める中で、チームで協力することの重要性を強く実感した。一人では乗り越えられないことでも、仲間と支え合うことで前に進めるという経験は、今後医療に携わる上でも大切な財産になると感じている。

勉強面では忙しい毎日だったが、この一年は部活動の陸上競技にも力を入れて取り組みたいと考えていた。限られた時間の中で、自分に必要な練習は何かを考へながら工夫して練習を

続けた。北医体では個人で入賞し、東医体ではリレーで優勝することができた。この結果は自分自身の大きな自信になり、なによりも今までたくさんお世話になった先輩方と金メダルを共有することができて非常にうれしかった。一方で、個人種目の結果には満足しておらず、課題も多い。自分の弱点と向き合い、さらなる競技力向上を目指して今後も練習に励みたい。

昨年は二十歳を迎えた年でもあった。成人式や同窓会では久しぶりに友人たちと再会しお酒を交えながら

一年間を振り返って

医学科3年 南 久生伶

二年生となり、解剖学や生理学をはじめとする基礎医学を学ぶ日々が始まった。微かな不安とこれから広がる幾多の学びへの期待を胸に日々勉学に励んだ。「なぜ手を開いたり、指を思うままに動かしたりできるのか」——幼少期に抱いた医学への素朴な疑問の答えは基礎医学の学びが深まるにつれて明らかとなった。解剖学をはじめ、免疫学、病理学、微生物学などの基礎医学はそれぞれが孤立した知ではなく、深いところで有機的に結びついている。学びを進めるにつれ、点と点がつながるように体系的に整理されていく過程を実感し、驚きと大きな喜びを覚えた。

一方で、新たな知識を得る喜びに満ちる反面、試験勉強に追われ、のめり込むあまり心が逼迫することも少なくなかった。いつしか目の前の試験にとらわれ、

「何よりも良い医師になりたい」という思いを強く実感した。この一年を通して強く実感したのは自分を支えてく

る人々の存在の大きさである。同じ目標に向かって切磋琢磨する仲間、離れていても常に私を支えてくれる家族、そして学生一人ひとりに真摯に向き合ってく

ださる先生方——そうした多くの支えの上に今の自分がある。周囲への感謝の気持ちを忘れず、これからも日々研鑽を重ねていきたい。

関連病院勤務報告

地域の病院で研修して

むつ総合病院 循環器内科 梅崎 仁志

むつ総合病院循環器内科の梅崎仁志と申します。このたびは貴重な機会を頂戴し、誠にありがとうございます。私は二〇一九年に弘前大学を卒業後、青森市民病院にて初期研修を修了し、循環器内科に入局して六年目となりました。二〇二三年からは一度臨床を離れて大学院に進学し、研究に専念いたしました。この春、無事に学位を取得することができました。熱心にご指導くださった先生方や、共に切磋琢磨した仲間にご厚く感謝申し上げます。

本年四月よりむつ総合病院循環器内科に赴任し、約三年ぶりに臨床の現場へ戻ってまいりました。まだまだ不慣れな点も多くありますが、上級医やスタッフの皆様を支えられながら、充実した日々を過ごしております。赴任から二か月が経過いたしましたので、現在の近況をご報告させていただきます。

むつ総合病院循環器内科に赴任してからは、遠方の医療機関への通院が困難な患者さんも少なくありません。当院で本治療を提供できるようになったことは、地域医療において大きな意義があると考えています。また近年は、下肢閉塞性動脈疾患に対するカテーテル治療(EVT)にも積極的に取り組んでおり、今後も地域に提供できる医療の幅をさらに広げていく所存です。私自身もその一端を担えるよう、日々研鑽を積んでまいります。

皆様の初めまして、三沢市立三沢病院産婦人科の張賀と申します。今回はこのように機会を頂きました。大変光栄に思います。二〇一六年に弘前大学を卒業し、今年で医師十一年目となり

仕事以外では、下北の豊かな自然や新鮮な海の幸に魅了され、公私ともに充実した時間を送っています。まだまだ学ばべきことはたくさんありますが、下北地域の医療に少しでも貢献できるような場をお借りして心より御礼申し上げます。

は喜ばしい限りですが、ただここ最近、受験生・学生をはじめとした若者にとって、新聞形式よりも動画などを含めたウェブ形式のほうが「刺さる」のは事実のようです。当委員会としまして、ウォーカー刊行や一般向けの公開講座の開催といったこれまでの活動を継続するとともに、学部生や若手研究者の紹介動画の作成、さらにはホームページの更新など、広報活動のバリエーションを増やすことで、弘前大学医学部研究科・医学部が、より多くの方々にとって身近な存在に感じていただけるよう、鋭意努力して参ります。よろしくお願ひ申し上げます。

医学部 こそばね話

「貝殻航路」

著者：久栖博季（くずひろき） 文芸春秋オンライン書籍

「貝殻航路」は、久栖博季（くずひろき）の小説で第174回芥川龍之介賞（2026年1月選考会）の候補作に選出されました。

久栖さんは、1987年生まれの北海道在住の作家です。弘前大学人文学部を卒業されており、2021年に「彫刻の感想」で第53回新潮新人賞を受賞してデビューしました。2024年には「ウミガメを砕く」で第37回三島由紀夫賞の候補にもなっています。

凧（なぎ）は、根室で育ち、結婚して釧路で暮らす26歳の女性。彼女にはアイヌをルーツに持つ放浪癖のある夫がいます。

そんな凧に特別養護老人ホームにいる父親の訃報が届きます。漁師だった父は、過去にロシアの警備艇に拿捕され、それをきっかけに人格が崩れ、母は家を出、幼い凧は父との生活に苦しみます。父の葬儀を済ませた凧は、遺骨と共に車で、父との思い出の場所である納沙布岬に向かいます。そこから見える「貝殻島」と

灯台。物語は、この灯台への車中（航路）を通して、父との確執や己が人生と向き合う様子が描かれていきます。

HIROMAGAの卒業生インタビューの質問、「『貝殻航路』にはどのようなテーマや想いが込められているのでしょうか」に対し、久栖さんは以下のように答えています。「テーマのようなものは、人が生きていくのに、その土地につけた痕。ちょうど船の航跡のようなもの、あるいはこれから進んでいく航路のようなもの。という感じです」。それでは貝殻島そして灯台に象徴されるものとは何でしょう？ それを意識しながら読み進めるところに本小説の醍醐味があります。

「北方領土」や「アイヌ」といった社会的な重いテーマを、あくまで個人の視点で描いているのがこの小説独自の価値になっていますが、加えて、車中からの風景描写や回想シーンに文学性が豊富に散りばめられており全体の重厚さを生み出しています。近い将来の弘前大学出身初の芥川賞に期待が膨らみます。



Lab memberとのチョコレート工場見学



Sports groupに留学する他のVisiting scholarとの一枚

留学先での活動は、臨床見学と基礎研究の二本柱で行っています。臨床面では、スポーツ医学・特に膝・肩関節分野で世界的に著名なDr. Maの外来や手術を見学させていただきました。日本ではまだまだあまり普及していないShort socket ACL再建術やAugmented ACL再建術など革新的な術式を積極的に取り入れながら、

一方で外来診療においては最新のエビデンスに基づいた丁寧な診療を実践されており、大変感銘を受けています。基礎研究については、Musculoskeletal Crosstalk LabにてDr. Collinsのもとで従事しています。Dr. Collinsは私より少し年上ながら、すでにPrincipal Investigatorを務め、複数の学会賞を受賞するとともにNatureやScience系列の学術誌に多数の論文を発表されている非常に優秀な研究者です。その一方で、私の拙い英語をいつも辛抱強く聞いてくださる素晴らしい人格者でもあります。日々深く感謝しております。現在ラボでは、変形性膝関節症を単一臓器疾患ではなく全身性疾患として捉え、特に脂肪組織との関連について研究を進めています。また、私の疫学研究のバックグラウンドを活かし、放射線科のDr. Thomasとの共同研究としてMRIを用いた研究にも取り組んでいます。アメリカの基礎研究の現場に身を置いて強く感じるのは、そのダイナミクスとスピードです。意思決定から実行までの速さ、研究規模の大きさには目を

見張るものがあります。一方で、予想以上に細部へのこだわりも強く、決して大雑把ではないという印象も持ちました。基礎研究の分野においては、日本が世界から取り残されつつあるという危機感を肌身をもって感じています。帰国後は、分野を超えたコラボレーションを積極的に推進し、より活発な研究活動に貢献したいと考えております。最後に、これから留学を検討されている先生方へアドバイスを申し上げます。留学には相応の資金が必要であり、留学先への採用・日本国内での助成金獲得のいずれを目指すにしても、博士号の取得と英語論文の執筆実績が大きな武器になります。なるべく若いうちに進めておきましょう。私自身、助成金獲得のために十件程度応募し、採択されたのは二件でした。また、

海外渡航の経験が乏しく英語を話す機会もほとんどなかった私にとって、留学当初の数ヶ月は精神的に非常に厳しい日々でした。留学には強靱なメンタルが求められます。それでも、アメリカの研究スピードや文化の中で得た知見と経験は、私の医師人生においてかけがえない財産になると確信しています。留学期間も残り少なくなりましたが、残りの時間も精一杯精進し、帰国後は臨床・研究の両面で今回の経験を還元できるよう努力してまいります。末筆ながら、留守中に多大なるご迷惑をおかけしている医局員の皆様、ならびに助成金をご支援いただいた上原記念財団・荒基金国際交流事業をはじめ、支えてくださった全ての皆様にごより感謝申し上げます。

若手教員・医師だより

附属病院／消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科

助教 須藤 亜希子

弘前大学医学部附属病院消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科の須藤亜希子と申します。このたびは医学部ウォーカーへの執筆の機会を賜り、心より御礼申し上げます。下部消化管グループでは、癒着性腸閉塞や虫垂炎といった良性疾患から、結腸癌・直腸癌などの悪性疾患、さらには炎症性腸疾患に対する手術治療まで幅広く診療を行っております。なかでも結腸癌・直腸癌は症例数が多く、日々の診療の中心を担っております。私

（次ページへ続く）

（前ページより）私は十和田市立中央病院で二年間研修させていだきました。十和田市立中央病院は、弘前大学だけでなく東北大学や秋田大学など、様々な医局から先生が赴任していました。他県の話や医局についての話が聞けてとても楽しかったのを覚えています。住居も官庁街通りという、桜の季節は花道になる素敵などありました。研修医は当直が一番輝ける場所だと思っておりますが、十和田市立中央病院は二次救急までを担当しており、軽傷から重症まで、また三次救急が無いため、搬送のタイミングについて学ばせてもらいました。上級医無しで一通り診

察や治療、帰宅させるかどうかの判断が出来るようになった時の喜びと、終始救急外来のベテラン看護師さん達に何度も助けられたことを思い出します。総合内科に魅力を感じて一年間在籍しましたが、専門性という自分の強みが欲しくなり、医師四年目で学生の時から興味があった産婦人科の専攻医となることを決めました。その後はむつ総合病院、青森県立中央病院、弘前大学医学部附属病院を経て二〇二三年に現在の三沢市立三沢病院へ異動となりました。

三沢市立三沢病院では、医師二名体制で分娩や外来、手術を行っていました。運よく腹腔鏡・ロボット手術をさせて頂く機会に恵まれて、手術応援の先生の力を借りながら微力ながら頑張っています。二〇二六年四月からは医師が三名に増え、日々の余裕ができて嬉しい限りです。三沢市立三沢病院での勤務は四年目に突入しました。今までは約二年毎に異動していたため、産婦人科の外来や病棟のスタッフに慣れてきたかな、くらいで異動していましたが、現在は産婦人科の外来、病棟以外のスタッフとも仲良くなり、慣れすぎて初心を忘れそうです。

日々の業務に追われがちではありますが、患者さんに真摯に診ることを忘れずに、コツコツとやっています。少しメリハリのある生活を送りたいです。二〇二五年五月より、アメリカ・カリフォルニア州のUniversity of California San Francisco (UCSF) Department of Orthopaedic Surgery, Musculoskeletal Crosstalk Labに留学させていただきます。UCSFは医歯薬に特化したアメリカ屈指の研究型大学で

二〇二五年五月より、アメリカ・カリフォルニア州のUniversity of California San Francisco (UCSF) Department of Orthopaedic Surgery, Musculoskeletal Crosstalk Labに留学させていただきます。UCSFは医歯薬に特化したアメリカ屈指の研究型大学で

留学だより USA留学便り

整形外科学講座 石橋 恭太

二〇二五年五月より、アメリカ・カリフォルニア州のUniversity of California San Francisco (UCSF) Department of Orthopaedic Surgery, Musculoskeletal Crosstalk Labに留学させていただきます。UCSFは医歯薬に特化したアメリカ屈指の研究型大学で

二〇二五年五月より、アメリカ・カリフォルニア州のUniversity of California San Francisco (UCSF) Department of Orthopaedic Surgery, Musculoskeletal Crosstalk Labに留学させていただきます。UCSFは医歯薬に特化したアメリカ屈指の研究型大学で

二〇二五年五月より、アメリカ・カリフォルニア州のUniversity of California San Francisco (UCSF) Department of Orthopaedic Surgery, Musculoskeletal Crosstalk Labに留学させていただきます。UCSFは医歯薬に特化したアメリカ屈指の研究型大学で

(前ページより) 消化器外科医を志した当時、大腸手術のアプローチは開腹が主流でしたが、現在では腹腔鏡、ロボットなど多様な選択肢があり、とりわけロボット手術は急速に普及しております。人体の解剖は変わらないものの、アプローチによって手術の要点は少しずつ異なる部分もあるように思われ、指導を受ける立場としても、後進を指導する立場としても、手術はかくも奥深いものかと改めて実感しております。

また、当グループでは再発大腸癌に対する治療にも積極的に取り組んでおります。不幸にして再発をきたした結腸癌、直腸癌では、病変が局所にとどまる場合、切除によって予後改善が期待できることが示されております。一方で他領域に及ぶ拡大手術を要する症例も少なくなく、大学病院へ紹介いただくケースも多くあります。当グループの上級医はもとより、血管外科、泌尿器科、婦人科、整形外科、形成外科など、各分野の先生方のご指導を仰ぎながら、完全切除を目指して診療にあたっております。

切除達成したときの充実感と安堵は、なにものにも代えがたい大きなやりがいです。手術のみならず、周術期管理においても、麻酔科、消化器内科、放射線科、精神科、リハビリテーション科、そして多職種の医療スタッフの皆様のご支援をいただきながら、患者さんに最適な治療戦略の提供に努めております。

近年、全国的に消化器外科医の減少が課題とされており、幸い当科では継続して多くの仲間を得ることができており、二〇二

六年度は五名の新入局員を迎えることができました。働き方改革にも積極的に取り組み、臨床と学術活動、QOLの調和を重視した、

若手教員・医師だより

附属病院/整形外科 助教 亀井 敬太

整形外科の亀井敬太と申します。このような貴重な機会を頂戴し、心より感謝申し上げます。医師十二年目となり、日々多くの患者様や先生方、医療スタッフの皆様を支えられながら診療を続けております。簡単ではございますが、ご挨拶申し上げます。

私は八戸市出身で、八戸高校硬式野球部にて白球を追いかけ、二〇〇八年に弘前大学医学部へ入学いたしました。自身の野球経験から整形外科に興味を持ち、学生時代から整形外科医を志しておりました。二〇一四年に卒業後、初期研修を経て、二〇一六年より弘前大学整形外科科学講座に所属しております。

整形外科は非常に幅広い診療科です。スポーツ、脊椎、関節外科、外傷、手外科、小児整形外科など、多岐にわたる分野を含みます。頭部を除く全身の骨・筋・関節を診療対象とし、新生児から高齢者まで幅広い年代の患者様を診療するため、患者数も多く、専門分化も進んでいます。

私自身も当初はスポーツ整形に興味を持っており、したが、研修病院で手外科や脊椎外科に触れ、大学院では肘関節を研究しながら、股関節外科を学びました。

その後、八戸市のはまなす医療療育センター、青森市のあすなろ療育福祉センターに勤務し、小児整形外科および障害児医療に携わる機会をいただきました。そこでの経験を通じて、小児整形外科という分野の重要性と奥深さを強く実感し、医局のご厚意もあり二〇二三年度には千葉県こども病院へ国内留学し研鑽を積みました。現在は整形外科手外科・外傷再建グループのスタッフとして、手外科と小児整形外科を専門に診療にあたりております。

非常に活気あふれる職場です。学生の皆様、研修医の先生方、ご関心をお持ちいただきましたら、是非よろしくお願いたします。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 教授 鈴木 真輔

当講座は一九五一年の医学部開設とともに開講され、七十年以上にわたり青森県の耳鼻咽喉科・頭頸部外科医療を牽引してきました。二〇二五年には私、鈴木が第六代教授に就任し、現在は十七名の医師(うち教員七名)が在籍しております。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科は、「聴く」「嗅ぐ」「味わう」「話す」「食べる」といった、人が豊かに生きるために欠かせない機能を担う診療科です。私たちは、これらの機能を守り支えることを使命として、研究・診療・教育に取り組んでいます。

研究面では、岩木健康増進プロジェクトへ積極的に参画し、感覚器の変化から全身の健康状態を捉える研究を推進しています。嗅覚と認知機能の研究では、嗅覚検査がMCI(軽度認知障害)に至る前段階の微細な認知機能低下を捉える指標となる可能性を報告しました。また、平衡機能(ふらつき)と認知症スコア、動脈硬化との関連についても詳細な解析を進めています。加齢性難聴に関しては、特定の遺伝子(NRF2)多型が、特に男性において難聴のリスク因子となることを明らかにしました。さらに、アレルギー研究では、成人におけるアレルギー感受率の増加を示すとともに、腸内細菌叢や脂肪酸(青魚由来脂肪酸など)がアレルギー発症や感作を抑制する可能性を分子レベルで解明しています。近年は、声の変化から全身の健康リスクを評価する世界的にも先駆的な研究にも取り組んでいます。このほか、頭頸部癌と糖尿病との関連について、分子病態病理学講座と連携しながら大学院生を中心に研究を進めています。また、



好酸球性中耳炎モデルマウスを用いた研究では、難治性炎症のメカニズム解明を目指しています。さらに、声帯麻痺や声帯萎縮に対する音声改善手術の効果を検証し、エビデンスに基づいた医療の確立に努めています。臨床では研究成果を還元するために高度な専門診療体制を整えています。頭頸部癌診療では、根治性のみならず「声」や「飲み込み」といった術後機能の温存を重視しています。即時再建を伴う拡大切除や鏡視下手術による低侵襲治療に加え、化学放射線療法、免疫チェックポイント阻害薬などの薬物療法、さらに二〇二一年より本邦で実施可能となった光免疫療法も積極的に導入しています。その結果、再発・転移症例においても、長期生存とQOL(生活の質)の維持を両立できる症例が増えています。耳科領域では、鼓室形成術に加え、アブミ骨手術、人工内耳埋込術、内視鏡下耳科手術(TEES)を積極的に実施しています。難聴



外来では遺伝学的検査を導入し、正確な原因診断に基づく治療選択や言語リハビリテーションへと繋がります。また、小児鼓膜緊張部内陷症に対する保存的治療や、突発性難聴に対するステロイド鼓室内注入療法など、患者さんごとの病態に応じたきめ細かな診療を行っています。アレルギー診療では、ガイドラインに基づく標準治療に加え、舌下免疫療法や、難治性好酸球性副鼻腔炎に対する生物学的製剤治療など、最新の知見を取り入れた医療を提供しております。

医療を取り巻く環境は大きく変化していますが、生活に欠かせない機能を守るという本質的な使命は変わりません。今後も、国内外の研究機関や地域医療機関との連携を深めながら、青森から世界へ発信できる診療・研究・教育を推進し、次世代を担う人材育成にも力を尽くしてまいります。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

研究室紹介

整形外科は、患者様の回復を直接実感できる魅力ある診療科です。もともと活動性の高い患者様も多く、術後に機能を取り戻していく過程をともに喜べることに、大きなやりがいを感じられます。今後も多くの仲間と協力しながら、青森県の地域医療に少しでも貢献できるよう、日々研鑽を重ねてまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願申し上げます。

糖鎖工学講座

糖鎖工学講座 准教授 柿崎 育子

弘前大学大学院医学研究科糖鎖工学講座は、礎である青森医学専門学校の医化学(一九四四年)の流れを汲み、新制弘前大学医学部の生化学講座(一九五四年)で、改称後の生化学第一講座(一九七二年)、

大学院の重点化による改組後の医学研究科附属高度先進医学研究センター糖鎖工(次ページへ続く)



（前ページより）
 学講座（二〇〇七年）を経て、現称（二〇二四年）となり、この間、偉大な教授達を中心に独創的で地道な研究が行われた歴史ある講座であり、同門の先生方は現在、臨床講座や県内外の機関で活躍です。同門の先生方の講座からは、現在も温かくご指導ご支援いただき、臨床講座に在籍する大学院生を学位論文の研究のために継続的に派遣いただいております。感謝申し上げます。

振興、教育の向上、産業の発展への寄与を目的とし、昨年度からは、学生による研究紹介を取り入れ、二十回目目の節目の今年度は、初めて高校生からの研究紹介も取り入れました。研究の魅力を若い世代に伝えるために、世話人によるランチョンセミナーで糖質の魅力を発信し、交流会では、世代、キャリア、所属（県内外）を越えて有意義な交流をしました。

教育面では、生化学教育と他学科の薬理学教育に加え、基礎講座から臨床講座への橋渡しも担っており、一年生前期のゼミの配属学生には、漢方医学にふれながら探究学習の基礎スキルを習得していただいております。企業様からご寄贈いただいた百種の生薬標本から、特定の方剤を構成する生薬を観察したり、臨床講座で外部資金により導入されたシミュレーターで腹診を体験したり、と、附属病院、臨床講座と連携して、知恵と労力をもち寄り、漢方医学教育に関わっております。

タンパク質に次ぐ第三の生命鎖を対象とする糖鎖研究は現在、東海国立大学機構などを核とした「J-GlycoNet」や「Human Glycome Atlas Project」として「All-Japan体制」で取り組まれており、当講座も深く関わり、多分野と融合して世界の生命科学や医学研究の発展の支えの一端を担っております。県内外の企業様と締結した共同研究も進めており

ます。今後も地域への貢献と若手の育成を目指すとともに、糖鎖の役割を化学構造に基づいて解明する研究に地道に取り組みで参ります。

弘前大学医学部山岳部の歴史は古く、昭和四十年に設立されました。一時活動を休止していた時期もありましたが、平成二十一年度有志の手によって再興を果たし、現在も活動を行っております。

私たちの活動の根幹にあるのは、「自然を安全に楽しむ」という姿勢です。山岳部と聞くと、ストックで厳しいイメージを持たれるかもしれませんが、医学部山岳部には初心者から本格的な登山を志す者まで、多様なメンバーが在籍しています。それぞれが自分の体力や目的に合わせて、自分のペースで山を楽しみ、自分のペースで山を楽しみます。

令和六年度は、四月のボルダリングを皮切りに、五月には津軽の象徴である岩木山への登頂を行いました。秋から冬にかけては活動の幅をさらに広げ、十一月にはクライミング講習会への参加や待浜・座頭石での実践的なクライミング、十二月には八甲田山の雪上訓練を実施しました。そして年明けの一月にはバックカントリースキー、二月

いと、折々に臨床の先生方には、さまざまのご指導、ご助言を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

私たちが活動の根幹にあるのは、「自然を安全に楽しむ」という姿勢です。山岳部と聞くと、ストックで厳しいイメージを持たれるかもしれませんが、医学部山岳部には初心者から本格的な登山を志す者まで、多様なメンバーが在籍しています。それぞれが自分の体力や目的に合わせて、自分のペースで山を楽しみ、自分のペースで山を楽しみます。

令和七年度は、さらに活動を活性化させる予定です。月に一〜二回、青森県内を中心に、岩木山、白神山、八甲田、十和田湖周辺など、豊かなフィールドを訪れる計画を立てています。

医学部山岳部では、ロッククライミング、冬山登山、バックカントリーなど、日常生活では決して味わえない非日常の体験が待っています。医学部の多忙な学業の合間に、仲間とともに険しい頂を目指し、絶景を眺める時間は、何物にも代えがたいリフレッシュとなります。

自然に触れたい方、新しいことに挑戦したい方、そして生涯の趣味を見つけた

私たちが医学部水泳部は、男子九人、女子九人の計十八人で活動しています。医学部水泳部では全学の水泳部と合同で行っており、総勢七十二人の部員で日々賑やかに活動しています。平日は駅近くのセントラルフィットネスクラブ、土曜日は石川プールで練習を行っています。平日の練習は朝六時三十分頃から始まる朝練であるため、放課後の時間をアルバイトや筋トレ、趣味などに充てることができ、学業との両立もしやすい環境です。

医学部水泳部としては「北医体」や「東医体」で自己ベストを更新すること、水泳部全体としては「北部地区国公立水泳競技大会」での団体権獲得を目標に、部員一同練習に励んでいます。初心者には初心者コースが設けられており、先輩方が丁寧に泳ぎ方を教えてくれるため、大学から水泳を始める方でも安心して活動できます。一方で、経験者にはインカレ出場経験を持つ選手も在籍しており、互いに切磋琢磨しながら成長できる環境となっています。また、実力ごとにコース分けがされているため、自分のレベルに合わせて無理なく練習に参加することが

水泳部は、他大学との交流やイベントが多いことも魅力の一つです。コロナ禍以降は、弘前大学、岩手大学、秋田大学の水泳部で交流する「弘バレ」も再開し、バレーボールやBBQを通して親睦を深めています。そのほかにも、部員同士で岩手へわんこそばを食べに行ったり、冬にはスキーに出かけたりと、多くのイベントがあります。水泳は個人競技ではありませんが、互いに教え合い、励まし合いながら楽しく活動しています。拙い文章で恐縮ですが、少しでも水泳部の魅力が伝われば幸いです。

最後に私たちが支援してくださっているOB・OGの皆様、先生方に、この場を

部活動紹介

山岳部

保健学科4年 山越温貴



八甲田でバックカントリーを楽しむ部長（山越温貴）

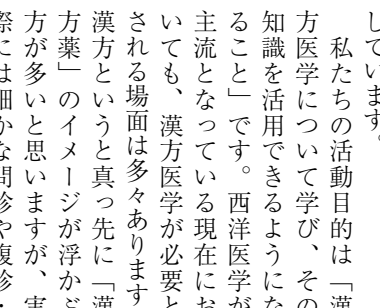
水泳部

医学科5年 西田圭佑



漢方医学研究会

医学科4年 杉山耕大



お借りして心より感謝申し上げます。今後とも医学部水泳部をよろしくお願ひいたします。

人事異動 (R8.3.1 ~ R8.5.31)

●医学研究科所属

【定年退職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R8.3.31	消化器外科学講座	教授	袴田 健一	弘前総合医療センター 院長
R8.3.31	救急災害・総合診療医学講座	教授	花田 裕之	弘前総合医療センター
R8.3.31	附属バイオメディカルリサーチセンター(血管・炎症医学講座)	教授	今泉 忠淳	
R8.3.31	附属バイオメディカルリサーチセンター(病態薬理学講座)	教授	村上 学	松平病院

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R8.4.1	消化器血液免疫内科学講座	准教授	飯野 勢	医学部附属病院 (消化器内科、血液内科、免疫内科) 講師
R8.4.1	循環器腎臓内科学講座	助教	日山 芽維	心臓病遠隔管理システム開発学講座 助手
R8.5.1	消化器外科学講座	教授	石戸 圭之輔	消化器外科学講座 准教授

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R8.4.1	大館・北秋田地域医療推進学講座	特任教授	袴田 健一	消化器外科学講座 教授
R8.4.1	地域救急医療学講座	特任教授	花田 裕之	救急災害・総合診療医学講座 教授
R8.4.1	消化器血液免疫内科学講座	助教	前田 高人	青森県立中央病院
R8.4.1	消化器外科学講座	助教	三橋 佑人	青森市民病院
R8.4.1	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	助教	葛西 崇	医学部附属病院 (耳鼻咽喉科頭頸部外科) 病院助手
R8.4.1	大館・北秋田地域医療推進学講座	助教	五十嵐 昌平	青森県立中央病院
R8.4.1	整形外科科学講座	助手	MASON ALNOURI	Al Jalila Children's Hospital
R8.4.1	泌尿器科学講座	助手	米山 文哉	市立函館病院
R8.4.1	眼科学講座	助手	小堀 宏理	医学部附属病院 (眼科) 病院助手
R8.4.1	産科婦人科学講座	助手	田口 朋子	弘前総合医療センター
R8.4.1	麻酔科学講座	助手	清川 聖代	医学部附属病院 (麻酔科) 病院助手
R8.4.1	地域医療支援学講座	助手	澤井 麻梨乃	東北医科薬科大学病院
R8.4.1	地域救急医療学講座	助教	猿賀 達郎	国立がん研究センター中央病院
R8.4.1	心臓病遠隔管理システム開発学講座	助手	川向 真徳文	医学部附属病院 (循環器内科、腎臓内科) 病院助手
R8.4.1	先進血液浄化療法学講座	助手	一山 貴希	鷹揚郷腎研究所弘前病院
R8.4.1	先進血液浄化療法学講座	助手	大溝 奏佑	大館市立総合病院
R8.5.1	がんゲノム医療学講座	教授	結城 敏志	北海道大学病院 講師
R8.5.1	むつ下北地域医療学講座	助教	高橋 正洋	弘前総合医療センター
R8.5.1	眼科学講座	助手	山邊 佑樹	医学部附属病院 (眼科) 病院助手
R8.5.1	附属健康未来イノベーションセンター	特任助手	夏目 彩佳	町田アント町商会 薬剤師

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R8.4.1	循環器腎臓内科学講座	講師	石田 祐司	むつ下北地域医療学講座 講師
R8.4.1	感染生体防御学講座	助教	川口 章吾	附属バイオメディカルリサーチセンター (血管・炎症医学講座) 助教
R8.4.1	内分泌代謝内科学講座	助教	藤田 朋之	医学部附属病院 (内分泌内科、糖尿病代謝内科) 助教
R8.4.1	整形外科科学講座	助教	藤田 拓	医学部附属病院 (整形外科) 助教
R8.4.1	附属バイオメディカルリサーチセンター(脳神経内科学講座)	助教	中村 崇志	医学部附属病院(高度救命救急センター) 助教
R8.4.1	地域医療学講座	助教	太田 真二	総合地域医療推進学講座 助教
R8.4.1	地域救急医療学講座	助教	小野 浩弥	整形外科科学講座 助教
R8.4.1	むつ下北地域医療学講座	助教	山崎 堅	循環器腎臓内科学講座 助教
R8.4.1	感染生体防御学講座	助手	立崎 真幸	附属バイオメディカルリサーチセンター (血管・炎症医学講座) 助手
R8.4.1	胸部心臓血管外科学講座	助手	村田 賢祐	医学部附属病院 (呼吸器外科、心臓血管外科) 助手
R8.4.1	救急・災害医学講座	助手	石山 絵里奈	麻酔科学講座 助手
R8.4.1	附属バイオメディカルリサーチセンター(分子病態薬理学講座)	助手	類家 英史	医学部附属病院 (病理部) 助手
R8.5.1	むつ下北地域医療学講座	助教	掛田 紗知	医学部附属病院 (放射線診断科) 助教

臨床教授・臨床准教授新規称号付与者名簿 (令和8年4月1日付)

称号名	氏 名	所 属	称号付与期間
臨床教授	堀内 大輔	八戸市立市民病院 循環器内科医長兼臨床工学科部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床教授	長谷川 幸裕	青森県立中央病院 呼吸器内科部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床教授	吉村 徹郎	青森市民病院 消化器内科部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床教授	佐藤 工	独立行政法人国立病院機構 弘前総合医療センター 小児科医長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床教授	敦賀 和志	独立行政法人国立病院機構 弘前総合医療センター 小児科医長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床准教授	上野 達哉	青森県立中央病院 脳神経内科部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床准教授	石原 佳奈	大館市立総合病院 産婦人科部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床准教授	越智 淳一	大館市立総合病院 呼吸器内科部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床准教授	高橋 良博	青森県立中央病院 小児科副部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床准教授	佐々木 伸也	つがる西北五広域連合つがる総合病院 小児科・第二科長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床准教授	大谷 勝記	青森県立中央病院 小児科副部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床准教授	池田 智文	青森県立中央病院 新生児科部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日
臨床准教授	横山 拓史	大館市立総合病院 外科部長	2026年4月1日 ~2029年3月31日

【任期満了退職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R8.3.31	生体構造医学講座	助教	白戸 佑貴	
R8.3.31	地域救急医療学講座	助教	小川 哲也	むつ総合病院
R8.3.31	附属健康・医療データサイエンス研究センター	特任助教	橋本 泰裕	
R8.3.31	附属健康未来イノベーションセンター	特任助教	田中 吏	弘前大学 Well-being 社会実装本部 助教
R8.3.31	感染生体防御学講座	助手	河合 智明	
R8.3.31	附属健康未来イノベーションセンター	特任助手	横山 慎太郎	岡山大学 教員

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R8.3.31	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	准教授	工藤 直美	八戸市立市民病院
R8.3.31	循環器腎臓内科学講座	講師	伊藤 太平	仙台循環器病センター
R8.3.31	地域医療学講座	講師	蓮井 桂介	佐々総合病院
R8.3.31	内分泌代謝内科学講座	助教	水尻 諭	おおむね内科クリニック
R8.3.31	消化器外科学講座	助教	久保田 隼介	弘前総合医療センター
R8.3.31	皮膚科学講座	助教	古川 和仁	きずとぎすあとのクリニック
R8.3.31	眼科学講座	助教	原 藍子	
R8.3.31	救急災害・総合診療医学講座	助教	平井 直樹	県外病院
R8.3.31	附属バイオメディカルリサーチセンター(分子病態薬理学講座)	助教	櫛引 英恵	青森市民病院
R8.3.31	胸部心臓血管外科学講座	助手	渡邊 崇人	新松戸中央総合病院
R8.3.31	泌尿器科学講座	助手	石井 伯昂	つがる総合病院
R8.3.31	産科婦人科学講座	助手	黒瀧 紗希	つがる総合病院
R8.3.31	先進血液浄化療法学講座	助手	大石 卓也	青森市民病院
R8.3.31	先進血液浄化療法学講座	助手	田中 龍馬	青森県立中央病院
R8.4.30	歯科口腔外科学講座	助教	伊神 英治	
R8.4.30	眼科学講座	助手	一戸 寛	神戸市立神戸アイセンター病院
R8.5.31	整形外科科学講座	准教授	和田 簡一郎	市立函館病院

●附属病院所属

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R8.4.1	消化器内科、血液内科、免疫内科	講師	佐藤 諭	消化器血液免疫内科学講座 助教
R8.4.1	高度救命救急センター	助教	引地 浩基	附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経内科学講座 助手

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R8.4.1	泌尿器科	講師	成田 拓磨	大館市立総合病院
R8.4.1	消化器内科、血液内科、免疫内科	助教	雨森 恭子	消化器内科、血液内科、免疫内科 病院助手
R8.4.1	内分泌内科、糖尿病代謝内科	助教	中村 遼馬	内分内科、糖尿病代謝内科 病院助手
R8.4.1	腫瘍内科	助教	陳 豫	腫瘍内科 病院助手
R8.4.1	呼吸器外科、心臓血管外科	助教	糸川 凜	呼吸器外科、心臓血管外科 病院助手
R8.4.1	整形外科	助教	中野 高晃	青森県立中央病院
R8.4.1	泌尿器科	助教	濱谷 智子	日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院
R8.4.1	放射線診断科	助教	掛田 紗知	キヤノンプレジジョン株式会社
R8.4.1	産科婦人科	助教	田中 誠悟	青森県立中央病院
R8.4.1	麻酔科	助教	石井 敦也	麻酔科 病院助手
R8.4.1	麻酔科	助教	外崎 充	麻酔科 病院助手
R8.4.1	歯科口腔外科	助教	高木 康貴	歯科口腔外科 病院助手
R8.4.1	集中治療部	助教	齋藤 くるみ	麻酔科 病院助手
R8.4.1	高度救命救急センター	助教	齋藤 数正	八戸市立市民病院
R8.4.1	高度救命救急センター	助教	田中 龍彦	周産母子センター 病院助手
R8.4.1	高度救命救急センター	助教	藤田 真子	脳神経内科 病院助手
R8.5.1	放射線診断科	助教	笠井 星良	放射線診断科 病院助手

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R8.4.1	光学医療診療部	准教授	菊池 英純	消化器血液免疫内科学講座 准教授

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R8.3.31	光学医療診療部	准教授	珍田 大輔	青森県総合健診センター
R8.3.31	泌尿器科	講師	小島 由太	武蔵野徳洲会病院
R8.3.31	消化器内科、血液内科、免疫内科	助教	澤田 洋平	青森県立中央病院
R8.3.31	泌尿器科	助教	富樫 赴	鷹揚郷腎研究所弘前病院
R8.3.31	産科婦人科	助教	大石 舞香	なし
R8.3.31	歯科口腔外科	助教	田中 祐介	平内歯科クリニック
R8.3.31	集中治療部	助教	赤石 真啓	健生病院
R8.3.31	高度救命救急センター	助教	濱舘 美里	三沢市立三沢病院
R8.3.31	麻酔科	助手	伊藤 磨矢	大館市立総合病院
R8.4.30	麻酔科	助教	石井 敦也	琉球大学 非常勤

診療教授等新規称号付与者 (R8.3~R8.5)

称 号	氏 名	所 属	期 間
診療講師	吉田 健太	消化器内科	令和8年4月1日~令和11年3月31日
診療講師	太田 真二	免疫内科	令和8年4月1日~令和11年3月31日
診療講師	岡野 健介	乳腺外科	令和8年4月1日~令和11年3月31日

編集後記

本号は無事に読者の皆様にお届けできることを、編集部一同より感謝申し上げます。ご寄稿いただきました皆様、厚く御礼申し上げます。

さて、中東情勢の緊張が物価高騰に直結し、現場の供給不安定化やコスト増となつています。多くの病院が厳しい舵取りを迫られるなか、高度な医療を追求する一方、足元を支える「プラスチック一枚」の確保に苦慮する現実には、医療界の脆弱さと繊細さを改めて痛感させられます。また、目を足元に向ければ、青森県内でのクマの出没や被害の増加など、私たちの日常の安全を脅かす身近な危機も深刻さを増しています。

こうした不安定な時代こそ、広い視野を持ち、地道な一歩が大切だと思います。本号の巻頭言で触れられた、「PEAKSが目指す「国際的な流動性」と「地域密着の強み」という視点は、この逆風を乗り越えるための道標を示してくれているように感じます。また、逆境の時こそ、文学や文化に触れて心を整える時間も大切にしたいと感じます。

困難な状況は続きますが、本学においては新任の教授二名が着任され、教育・研究・臨床の各現場に大変心強い、新たな風が吹き込んできました。さらには、多くの若手研究者や医師たちが優れた賞を受賞するなど、次世代を担う芽も着実に育っています。この新しい力と瑞々しい活力にあふれた新体制のもと、未来を見据えて一歩ずつ前に進んでいきたいと思っております。「冷静な視点で、目の前の課題に最善を尽くす」、このバランスを保ちながら進むためのヒントを、本誌を通じて皆様と共有していければ幸いです。

(畠山真吾)